
《連載小説》 『俺たちあ夫婦で管理人』

鉄下 学

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《連載小説》『俺たちやあ夫婦で管理人』

【Nコード】

N1852C

【作者名】

鉄下 学

【あらすじ】

源次郎と美佐子は夫婦で賃貸マンションの管理人をしている。そのマンションに突然、若い女がやってきてある男の部屋を開けろと言う。そこから、驚きの一日が始まった。

第1話 兄と妹 (その1) (前書き)

この連載小説は某ブログに掲載しているものを転載したものです。

第1話 兄と妹（その1）

その女は、朝早く、突然にやってきた。

「507号室にいる向井忠明の妹なんですが・・・。」と小さな管理室の窓口を覗いてくる。

そう言えば、何度か見たような顔である。何となく陰のある、それでいて品のある顔立ちである。

「実は、昨夜から兄に電話をしているんですが、出ないんですよ。」と心配そうに言う。

「それでしたら、部屋のほうへ行かれても構いませんよ。」

「今、部屋に行ってノックしたんですけれど、出てこないんです。」

「だったら、旅行にでもお出かけされてるんじゃないですか？週末ですしね。」

「いえ、そんな筈はないんです。」

女はそう断言する。柔らかな言い方だが、凜とした強さがある。

「そう、おっしゃってもねえ。私も、監視しているわけではないんですし。」と源次郎はぼやく。

女は、困ったように考え込んでいる。

「すみませんが、部屋の合鍵、お借りできませんか？」と女が言う。

「それは、出来ませんよ。規則ですからね。たとえ妹さんでもそれは駄目です。」

ここは、管理人としての立場を強調する。これは譲れない。

「だったら、管理人さんが立ち会って貰って結構ですから、合鍵で部屋へ入らせてください。お願いします。」

女が切羽詰ったような顔をする。これには弱い。

だが、奥には妻の美佐子がいる。そう、甘い顔もしてられない。

「そうおっしゃってもねえ。ご本人の許可がないのに、部屋を開けるだなんて、できるものじゃあないですよ。管理人としての立場もありますしね。」

「兄には持病があるんです。万一のことがあったら、管理人さんの責任ですよ。」

女が気色ばむ。

奥から、美佐子が出てくる。頭にナイトキャップをつけたままである。

「あんた、一緒に行つてあげたら？お困りのようだし。それに、何かあったらうちも困るしね。」と言う。

美佐子がそういうのだったら、こりゃ行くしかない。

源次郎は、金庫から合鍵の束を取り出して、先を急ぐ女の後ろを付いていく。

(つづく)

第1話 兄と妹（その2）

部屋の前に立って、インターホンを押す。中で鳴っている音がする。

「ですから、何度呼んでも出ないって言ったでしょう！早く開けてください。」と女が急かす。

「向井さん！おられないんですか！」と大声で叫んでみる。

一刻も早く開けてやりたい気持はあるのだが、やはり管理人としての立場もある。一応の手順は踏まねばなるまいと考えていた。ついで、ドアをドンドンと叩く。

ドアに耳を付ける。それでも、人の気配はない。

「妹さんが来られています。お返事がなければ、部屋を開けさせてもらいますよ。」と、ひときわ大きな声で叫んでみる。

「もう、それでいいでしょう、早く開けてください！」女は、もう待てないという顔をする。

隣の部屋の女の子が顔を出す。そのまた隣のお竹さんも出てくる。何事？という顔をしている。

「申し訳ありませんが、お部屋開けさせてもらいます。」と叫んで、合鍵を差し込む。
ガチャッという音がして、鍵が回る。

ドアを開けると、源次郎の脇を掻い潜るようにして女が部屋へ飛び込んでいく。勝手を知っているのだろう、迷いもせずに右手の和室を曳き開ける。そして一瞬棒立ちのようになってから、中へ倒れ込

むように入る。

「忠明さん！」という叫び声がする。

でも、入り口に突っ立っている源次郎からは、中の様子が分からない。

「入りますよ。」と声をかけてから、突っ掛けを脱いで中へ入る。和室をそっと覗き込む。布団らしきものがちらりとだけ見えた。

「救急車、救急車を呼んでください！」と女が叫ぶ。顔面蒼白である。

「えっ！・・・あっ！・・・はい、救急車ですね。・・・」と源次郎は狼狽する。

部屋の入り口でその様子を見ていた隣の部屋の女の子が、自分の持っていた携帯電話を差し出してくれる。でも、源次郎はどうして良いのか分からないでいる。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その3)

「脳溢血だと思います。救急にはそう伝えてください！」女が大きな声で言う。

「おじさん、私が電話する。」と隣の女の子、及川可奈が言ってくれる。

「そうか、じゃあ頼む。」と答えたものの、これからどうすりゃいいのかが分からない。気が動転してる。

「源さん、あんたは下へ行って、入り口のところで救急車を待つんだよ。それから、玄関先に何台も停まっている自転車をごかせておくんだよ。あれじゃ、救急車が横付けできないからね。・・・分かった？」

お竹さんにそう言われて、源次郎は「なるほど！」と思った。

「それからね、下へ降りたら、美佐ちゃんにここへ来るように言つてよ。忘れちゃ駄目だよ。」とお竹さんが続ける。

「よっしゃ！」と言って、源次郎は廊下を走った。

慌てて、エレベーターで階下に向かう。毎日乗っているのに、これほど、エレベーターの動くのが遅いと感じたことはなかった。

「おっ！そうだ。美佐子にも言っとかなきゃ。」

ようやく妻の顔を思い浮かべる。

「119」へ通報していた可奈が携帯電話を切った。

「救急車、7、8分で来れると言ってました。動かさないようにとも言っていましたよ。」と奥の和室に向かって言う。

「ありがとう。ついでで悪いんだけど、そのドア、開けたままで

固定しておいてくれない？ストレッチャーが来ると思うから。」と女が言う。

このマンションのドアは、開けてそのままにすると自動的に閉まるようになっていいる。便利なようだが、引越しをするときなどは、不便に思うことがある。

「分かりました。直ぐにやっときます。」と言って、可奈は一旦自分の部屋へ戻る。

「妹さん、保険証のあるところを知らない？下着なんかは適当にその辺にあるものを纏めておいたんだけど、肝心の保険証の場所が分からないもんで。」

お竹さんはいつの間にか大きな紙袋を準備していた。

「有難うございます。保険証の場所は知っていますので、後で入れます。」

女は振り返るようにしてそう言いながらも、片時もその布団から離れようとはしない。

枕を外して頭を水平にし、男の顔を横に向かせるようにして、軽く押さえている。

「あんた、心得があるんだね。よかったよ。」

遠く目に見ていたお竹さんが、女の行動を見ていて、そうつぶやいた。

遠くから、救急車の音が聞こえてくる。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その4)

一階まで降りた源次郎は、真っ先に美佐子のところへ行く。

「美佐子、エライこっちゃ。」

「どうだった？向井さん、いたの？」と美佐子のはのんびりと訊く。

「いたにはいたんだけど、脳・・・何とか・・・でね、今、救急車呼んだんだ。」

化粧台に向かっていた美佐子が、振り向いて叫ぶ。

「あんた！ど、どうしてそれを先に言わんのよ。こんなことしてる場合じゃないわ。」

手にしていた口紅を放り投げて、すくっと立った。

「脳溢血？ぶっ倒れて怪我してるんじゃないわよね。死んでないわよね？」

「様子はどうだったの？」

「今、誰が傍にいるの？妹さんだけ？」

美佐子は矢継ぎ早に質問する。源次郎には答える暇もない。頷くか、首を横に振るだけだ。

ただ、脳溢血だったか、脳梗塞だったかがはっきりとしない。慌てていて、覚えられていない。

美佐子は長い髪を束ねながら、金庫のある方へ動き出す。髪を輪ゴムで止める。

「分かった。じゃあ、あんたは外で救急車を待って。私は、エレベーターを止めるから。」

「あっ！そうだ。お竹さんが美佐子にあがってきてくれて言っていた。」ようやく源次郎が口を挟む。

「ああ、お竹さんがいてくれるのね。だったら安心だわ。」美佐子がしきりに頷く。

源次郎にはその意味が分からない。だが、美佐子に促されるようにして表に出て行く。今は考えている暇はない。

通りに面したマンションの玄関先には自転車が10台ぐらい置かれている。

規則では、裏の駐輪場へ入れることになっているのだが、邪魔臭いのか、ここへ置く奴がかなりいる。

日頃から、停めるところを見つけたら個別に注意するのだが、なかなか現場を押さえられない。

できれば、そうしたことを言いたくないというのが源次郎の心境なのである。

気持ちよく住んで欲しい、ただそれだけなのだ。

駐輪場まで持つてく時間はない。とりあえず、邪魔になりそうなら6台を通路の脇にかためて寄せる。

そうしているうちに、大通りからの角を赤色灯を付けた救急車がやってくるのが見えた。

けたたましい音である。

源次郎は、マンション前の通りに飛び出して、両手を大きく振って合図する。

呼吸が荒くなっているのを感じる。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その5)

マンションの玄関先で救急車が停まる。

前と後ろのドアが開いて、中から救急隊員が跳んで出てくる。

「患者さんはどこですか？」と前から降りてきた隊員が端的に訊く。

「部屋です。自分の部屋。」源次郎が答える。

「何階ですか？」

「5階です。」

「通報者の方はそこにおられますか？」

「……えーと……」と、源次郎は答えられない。

「5階だ。上げて！」とその隊員が言うと、後ろから降りてきた隊員2人が、ストレッチャーを立てて、エレベータホールへ走り出す。ひとりは大きな鞆を肩から提げている。

そのとき、入り口に近いところにあつた自転車と接触したが、隊員は構わずストレッチャーを押して入っていく。

救急車の音を聞きつけた野次馬達が、遠巻きに集まり始めている。

エレベーターはドアを開いた状態で1階で止められていた。美佐子はその入り口に立っていて、ストレッチャーと隊員が乗ってから、手動で5階へ直行する。

「エレベーターを降りたら、左です。ドアも開けてあります。」と美佐子が言う。

「患者さんはいくつの方です？」と若い方の隊員が訊く。

「確か、60にはなっていないと思いますけれど・・・」と美佐子が答える。

5階に着いてドアが開くと、隊員はすばやく左へ向いて走った。20メートルぐらい先にドアの開いた部屋があつて、その前に20代前半だと思われる女性が立っているのが見える。

2人の隊員はまっしぐらにそこへ向かう。

ストレッチャーを部屋の前において、部屋へ入る。まずは患者を！と言うことなのだろう。

お竹さんの誘導によって、隊員が和室に入る。

「はい、そこをどいてください。」と若い方の隊員が言う。それまで片時もそこを離れずに男の頭を押さえていた女が素直に席を譲って、入れ替わりにやや中年の隊員がそこに屈み込む。

鞆から器具を取り出して、瞳孔の状態や咽喉の状態などを確認する。

布団の辺りには嘔吐の痕跡があることから、まずは呼吸の確保を優先する。

「分かりますか？聞こえますか？・・・」と意識反応を探る。

男は、ぐったりした状態で、意識もないのか、まったく反応しない。

「確かに脳溢血の可能性大ですね。詳しいことは病院で検査しないとできませんが。」と診ていた隊員が誰にともなく言う。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その6)

その間に若い方の隊員が「通報者」である及川可奈から話を聞く。だが、彼女は単に通報しただけで、詳しいことは話せない。

「では、脳溢血だと言ったのは？」と気になっていることだけを確認する。

「それは、妹さんがそのようにおっしゃったので。」と可奈が答える。

「妹さん？」

「今、傍についておられる方です。脳溢血だと伝えてくれと。」

隊員が取って返して、和室に居た女に確認する。

「患者さんの妹さんですか？」

「はい。そうです。」と女が答える。

「発見されたのもあなたですか？」

「はい。発病は昨夜ではないかと思いますが・・・。」

「ご一緒におられたのですか？」

「いえ、彼は、ひとりで住んでいましたから。」

「では、どうして・・・？」

そこまでで、年上の隊員が口を挟む。

「医師をなさっているんですか？処置が非常に適切にされていますから。」

「いえ、看護師ですが・・・。」

「やはりね・・・。おっしゃるとおり、脳溢血だと思います。嘔吐があります。幸い呼吸がしっかり確保されていますので直ぐに搬送します。ご指定の病院はありますか？」

「でしたら、すみませんが、山王大学付属へお願いします。主治医

がそこにおりますから。」

「分かりました。その主治医の名前を教えてください。」とその隊員が言って、無線でどこかと交信を始める。

若い方の隊員がストレッチャーを部屋まで入れる。

「了解!」といって無線交信を終えた隊員が、

「山王付属が受け入れをOKしましたので、そこへ搬送します。」と言う。

隊員2人で、布団の上にかかっているシートごと、男の身体をストレッチャーに乗せる。

上からベルトをかけて、患者の身体を固定する。

隊員はストレッチャーを前後で挟むようにして、エレベーターの方へ向かう。

その後を、女が紙袋を手走るように追いかける。
あっという間の出来事である。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その7)

美佐子は、停めたエレベーターの傍で待っていた。直ぐに病院へ搬送するだろうとの読みである。

隊員とストレッチャーと女を乗せてから、最後に自分が操作盤の傍に立つ。

ストレッチャーに乗せられた男の顔が見えた。

キーを操作して、1階へ直行させる。動いている間にちらりと、女の顔を見る。

1階に着いて、ストレッチャーがスロープを救急車に向かって滑るように運ばれる。

気になっていた自転車も、ぶつからない様に整理されていた。

「では、私が付いて行きます。また、ご連絡しますので、よろしくお願いします。」と女が美佐子に言う。

「お大事に」と美佐子が答える。
最後に女が乗り込んで、救急車は、またけたたましい音を立てて走り去っていく。

辺りに集まっていた野次馬に、不謹慎にも安堵感と物足らなさが入り混じったような雰囲気漂う。

「管理人さん、エレベーター使ってもいいですよね。」との声で、美佐子が我に帰った。

「はいはい、もういいですよ。キーを解除しますから……」と言いながら、エレベーターホールへ向かう。

その美佐子にも、何か、不可思議な気分が残っている。

「ご苦労さんやったね。」と近づいてきた源次郎に声を掛ける。
「えらいこっちゃったなあ、びっくりや。」と源次郎が答える。

「私はもう一度上へ行ってくるから、あんたは管理人室におつてや。」と美佐子。

「あいよ。」と源次郎。

もう一度507号室に上がった美佐子は、まだ開けたままになっていたドアのところで、お竹さんを捕まえる。

「お竹さん、ほんまご苦労さん。」

「いやあ、驚いたわ。美佐ちゃんも大変やったなあ。」

「でも、うちのから、お竹さんが傍にいるって聞いて、少しは安心したわ。」と持ち上げる。

「源さんが大声出してたから、一体何があったんかと思うて。丁度、買い物に行こうかと思うてたさかい。」

「いやあ、ほんまに助かったわ。脳溢血か脑梗塞かは知らんけれど、万一のことがあったら、後々エライコトになるさかい。」

「脳溢血や言うてたで、救急隊員も。まあ、見た所、命には別状ないとは思うけれど、後遺症は気になるわなあ。ところでや、あの妹さんっていう人、看護師なんやて。本人が言うてたで。」

「そうなの？」

美佐子は意外な感じがする。何度かは見ているが、看護師をしている風には見えなかったのだ。

「妹というのも違うなあ。あれは、男と女やで。見てれば分かる。」とお竹さんは断言する。

「まさかー！」と美佐子と思う。思うが、明確な否定も出来ない。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その8)

「どうして、そう思う？」と美佐子が訊く。

お竹さんは「何でもお見通しよ!」という得意顔のまま、しばらくは黙っている。

彼女は、65歳。病院で付添婦をして生計を立てている。息子と娘がいるそうだが、美佐子は会ったことはない。このマンションにも、ひとりで引越してきた。

身寄りが無いというのではなく、他人に迷惑を掛けずに生きていこうとするタイプのおばさんである。

そのくせ、人の面倒見は非常にいい。

美佐子も、煮物の作り方や、苦手な裁縫などを教えてもらったことが度々あった。

すこぶる元気なおばさんなのだ。

「あのねえ。美佐ちゃんだったら、自分の兄さんのこと、名前に“さん付け”で呼ぶ？」

お竹さんは、何かを思い出すようにほぞぼそと話し始める。

「あの妹さんは、兄さんを“さん付け”で呼んだの？」

美佐子にはイメージが湧かない。

「そう、源さんが部屋を開けたとき、“忠明さん”ってね。」

お竹さんは声を潜めて言う。

「慌てたらからじゃないの？」

「慌ててるからこそ、日頃の呼び方がそのまま出るんじゃない？“兄さん!” って言うのが普通じゃない？それを“忠明さん”と呼ん

だんだからねえ。」

「義理の兄妹ってことじゃないのかなあ。」と美佐子がつぶやく。どう考えても男女の仲とは思えないのだ。

「美佐ちゃん、あんたはまだまだ若い。」とお竹さんはにっこりと笑う。

「でも、義理の兄妹ってこともあるし……」と美佐子は食い下がる。

「義理の兄妹だったら、嘔吐物を手で掻き出せんよ。いくら看護師でもね。」

病院の付添婦をしているお竹さんが言うことだから、確かに説得力はある。あるのだが、美佐子には納得できない。

「向井さんは一人住まいだね。」とお竹さん。

「そうやけど。……」美佐子は、その後の言葉が出てこないのだ。

ドアが開いたままになっている507号室の奥をお竹さんが指差す。

美佐子はその指先を見る。

「あそこに、炊事場があるやろ。それで、そこに洗物を入れた籠が置いてあるんや。」

間取りはどこも同じに作ってあるから、台所の位置は分かっている。その端においてある籠も入り口に立っている美佐子から眺められる。

「それがどうしたん？」と美佐子が訊く。

「あの籠にはな、夫婦茶碗と夫婦箸が入っとる。」

お竹さんは動かぬ証拠を突き止めた刑事のような言い方をする。

($\sim$)
($\sim$)
($\sim$)
($\sim$)

第1話 兄と妹 (その9)

夫婦茶碗があるってことは……。と美佐子は考える。

507号室の向井忠明には、そうした女性がいる、ということに他ならない。

では、その女性とは？と考えても、行き当たらない。

向井忠明は、5年前、このマンションが出来たときからの入居者である。提携している不動産屋の紹介だったが、社名を言うとなんか知っている一流の会社に勤めていると言う。名刺も貰ったが、嘘はないだろうと思っている。肩書きは「企画部 調整担当部長」となっていた。

入居者カードによると、年齢は現在58歳。同居者はいない。緊急の連絡先として、仙台にある実家の電話番号が記載されていて、相手は「妻、良子」と記されている。

つまり、れっきとした妻帯者なのである。

「大阪本社に転勤となったものですから……」と入居時に語っていたことを思い出す。いずれは、何年か経てば仙台の実家に戻るのであろうと勝手に想像していた。

でも、よく考えてみると5年も経っているのだ。まだ、戻して貰えないのか、それともやはり本社のほうが居心地が良くて本人の希望なのかは分からないが、少し長いような気がする。

「他に、尋ねてくるような女性はいたかい？」とお竹さんは言う。

「うーん。確かに、女性と言えば、あの妹さんぐらいだけれど……」と美佐子は承服できない。

平日、向井は、毎朝、ほぼ同じ時刻に出かけて、ほぼ同じ時刻に帰ってくる。

そして、夕刻に出会々と、必ずと言っていいほど、近くのスーパーのレジ袋を下げている。

「お帰りなさい」と言うのと、にっこり笑って「ただいま帰りました」ときちんと挨拶をくれる。

いつも地味目のスーツを着ていて、黒ぶちの眼鏡を掛けている。

家賃も銀行口座からの自動引き落としにしてくれている。

流石に一流企業の部長さんだ、という印象があるのだ。

こうした賃貸マンションにはいろいろな人物が入居してくる。殆どが提携の不動産屋からの紹介で入居するのだが、こちらも商売なので、お金さえきちんと払ってくれそうであれば、その他の条件、年齢や性別、勤務先などを基準にして、入居者を選別することは出来ないのが実情なのだ。

でも、結果として、向井のような紳士風の入居者がいることは、所有者としても好ましいことだと思っている。

「向井さんは、きっと、いい人なんだろうね。」とお竹さんは意味ありげに微笑む。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その10)

「そうね、良い人よね。」と美佐子が応じると、

「その、いい人ではなくて、あの妹さんだと名乗る彼女にとってだよ。好きな男こゝろってこと。」とお竹さんが親指を立ててにこりと笑う。

「おっと、買い物に行かなくちあ。今日は午後から仕事やさかい。後は頼んだで。よろしゅうに。」

お竹さんは、そう言って、507号室の中を再度見渡すようにしてから、足早にそこを去っていく。

その小さな後姿を目で追いながら、「お竹さんって、相変わらず元気やなあ」と美佐子は感心する。

身長も150センチぐらいで、華奢な体つきである。あれで、付添婦をしているのだ。時間も不規則だし、当然のように徹夜での仕事もある。なのに、疲れたような顔を見せたことがない。

あの元気はどこから来るのだろうか？

すぐ後ろでドアの開く音がして、可奈が出てくる。

「あっ、管理人さん。向井のおじさん大丈夫なんでしょうか？」と訊く。

「心配してるんだけど、まだ様子が分からないから。連絡もないし。でも、脳溢血って、頭の病気だから、ひよっとすると暫くは入院ってことになるんじゃないのかなあ。」と美佐子が答える。

医学的な知識は殆どないのだから、それぐらいしか言いようがない。

可奈は「早く退院できるといいのにね。」と言いながら、ドアの下に挟みこんであつた雑誌を取り去る。

「この本、もう取ってもいいですよ。」と確認してくる。

「あつ、それは可奈ちゃんが差し込んでくれたの?・・・もう、いいよ。後は、私が施錠しとくから。」と言うと、

「この本、向井のおじさんから貰ったんだけど、まだ読み終わっていないから、貰って帰りますね。」と取り上げた雑誌から丁寧な埃を払っている。

へえ、向井さんとの子、そんな間柄なんだ!と美佐子是不思議な思いがする。

一瞬、お竹さんが言った「夫婦茶碗の女」がこの子だったら・・・と考えて、まさかそんな訳はないか、と自分で否定する。60歳手前のおっさんと、20歳過ぎの女子大生。まさか、である。

パタパタと払われているその雑誌を意識して見ると、「広告業報」という業界雑誌のようである。

やはり、考えすぎだと美佐子は自嘲する。自然と笑えて来る。

「向井のおじさん、昨夜、妹さんが帰られてからなんでしょうね。倒れられたのは。」と可奈がポツリと言う。

「えっ!あの妹さん、昨夜も来てたの?・・・」と美佐子が素っ頓狂な声を上げる。

(つづく)

第1話 兄と妹（その11）

「はい、私がバイトから帰ったときに擦れ違いましたから、午後1時半ぐらいだったと思いますよ。お帰りになったのは。」
可奈は明確にそう答える。

このマンションの管理人業務は、一応午後の6時までと決めてある。如何に、その1階に住んでいるからといって、24時間管理人をやるつもりもないし、やれる訳もない。

だから、現実的には、管理人が知らない来訪者があっても当然であるのだが、日頃の向井を知っているだけに、まさか夜になって女が尋ねて来るようなことは想像していなかったただけなのだ。

「そうなの、そうなのか。」と美佐子がつぶやく。

お竹さんの笑う顔が目には浮かんでくる。「あんたは、まだまだ若い・・・」と。

「じゃあ、向井のおじさんの様子が分かったら、また教えてくださいね。私、今日は大学もバイトも休みですから、一日部屋にいますし。」と言って、可奈は自室の508号室に帰っていく。

「いろいろと、厄介掛けて、有難うね。」と美佐子が礼を言う。

先ほどの雑誌を抱くように持って、可奈が一礼をして自室のドアを閉めた。

「そうか、そんなんだ。」と美佐子は繰り返しながら、507号室へ入る。

この住人はいつ戻れるか分からないのだが、取り敢えずは、現状だけは確認しておかないと、火の始末や水の出しっぱなしなどあって

も困るのだ。

部屋に上がる際に、「火の気と水周りだけは確かめとかなくっちゃね。」と声に出して言う。誰もいないはずなのだが、やはり他人の住んでいる部屋である。

部屋へ上がって、和室、トイレ、バスと順に見て回ることにする。和室には、何か異臭が残っている。嘔吐物の匂いだ。喚起ぐらいしておかねば・・・とベランダへのガラス戸を開ける。爽やかな空気が入ってくる。

和室の中央に布団が敷かれているが、掛け布団は跳ね除けられた状態で、シーツは剥がされたようになっていている。

「そうか、ここで倒れてたんだな。」と思う。

部屋の隅においてあった掃除機を使って、散らかったものだけを掃除する。

それから、トイレ、バス、と覗いてみるが、水の出しっぱなしなどは見当たらない。

最後にキッチンを見渡す。お竹さんが言っていた「水切り籠」があって、その中には確かに夫婦茶碗が重なるように入っていた。

男用の大きな茶碗に少し寄りかかるように女用の小ぶりの茶碗が被さっている。

美佐子が遠くに忘れてきたような風景がそこにはあった。

最後に、ガスの元栓を締めてから、部屋を出る。

「1時間ぐらい喚起してから、改めて閉めにくればいいわよね。」と考える。

腕時計を見ると、まだ午前8時になっていなかった。
長い1日になりそうな気がする。

($\sim$)
($\sim$)
($\sim$)
($\sim$)

第1話 兄と妹（その12）

美佐子が1階の管理人室に戻った。

源次郎は、机で何かを書いていた。

「あんた、あれから、向井さんの妹さんから連絡あった？」と源次郎に訊く。

源次郎は、手にしていた筆ペンを持ち上げたまま、

「いやあ、何もないよ。まだ、それどころじゃないんだろ？」と答える。

何をしているのか？と覗いて見ると、A4サイズの紙に『自転車は駐輪場へ』と書いている。

「こうでもないとい、いつまでも玄関先におかれるだろう。」と言う。

「そんなことしても、効果あるかねえ？」と美佐子は疑問視する。

「何もしないよりは、マシだろうよ。」

「いちいち言うのが嫌なんでしょう？」と美佐子は笑う。

図星だったようで、源次郎はまた黙々と書き続けている。何枚か同じものを作るつもりのようなのだ。

任せておこうと思っている。

「ところで、搬送した病院は山王付属なんだろう？あそこだったら、きつと大丈夫だよ。」

マスターキーを金庫に入れようとしている美佐子に、源次郎が言う。

「誰から聞いたの？」と美佐子が怪訝に思う。

「救急隊員が無線で話しているのを耳にしたただけだけど。」と書く

手を止めないで源次郎が答える。

美佐子は、源次郎の口から山王大学付属病院の名前が出ることに驚いた。

「あんた、そこって知ってるの？」

「ああ、以前、佐伯の奴が入院してたところやから。」

「佐伯って、あの佐伯さん？」

「そうや。大きな病院やで。」

「それって、いつ頃の話？」

「もう、かれこれ、7、8年にもなるかいなあ。」

「そんな昔？」

「あいつが会社で倒れたとき、会社の管理医がその出身だったから、無理を頼んで入院させたんや。駄目かも知れへんと言われたのに、あいつ、3ヵ月後には復職しよった。脳梗塞やったかな。」

源次郎が遠くを見るように話している。

「そう、そうなの。大きな病院なんだね。」と美佐子は感心する。

それは、妹だと名乗る女が指定した病院が想像していたよりも大きなものであったことと、さらには、その病院を夫である源次郎が知っていたという事実に対してである。

源次郎は、今は、こうして美佐子とともにマンションの管理人をしているが、2年前までは中堅の工作機器メーカーである「太平洋工作機」という会社の総務部次長をしていた男である。

会社でのことは殆ど話さない夫だったが、そうした部下の危機の際にも、丁寧な対応が出来ていたのだ。

定年退職後の今も、新年には必ず挨拶にやってくる佐伯という男の顔を改めて思い出す。そうした繋がりや因縁もあつての丁寧な挨拶だったのだと思う。

美佐子は、知らなかった夫の一面を、この年になって、改めて見せられたような気になる。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その13)

「あっ！そうや。あんた、昨夜、あの妹さん来てたらしいで。知ってた？」と美佐子が思い出したように問う。

昨夜は、町内会の防犯対策の一環としての「夜回り」が行われていて、このマンションからも1名参加するように言われていたことから、その役を源次郎に頼んであった。

午後8時から10時ぐらいまでの2時間、この地域の周辺をパトロールしていたはずだった。

「そんなこと言われても、分かるかいや！」

源次郎は、昨夜のことを思い返すように、腹立ち紛れにそう答える。

昨夜は、夜の9時から懐かしい映画が放映される予定であった。それを見たかったのだ。

朝から、楽しみにしていた。なのに、美佐子から「夜回り」を命じられたのだ。

いくら大人しい性格でも、多少は「むっ！」とするものがあった。

「そら、そうやな。このマンションを見回ってる訳やなし。」と美佐子は淡々と言う。

それっきり、源次郎は黙ってしまう。ただ、ひたすら張り紙作りを続けている。

今日は土曜日である。

今朝は、早くからあのような騒ぎがあったが、通常の土曜日は静かなものなのだ。

ようやく、そのいつもの静けさが帰ってきたような気がする美佐子であった。

「そうや、田辺さんと、井田さん、もう出て行った？」と訊く。先月末には貰うべき「今月の家賃」がまだなのだ。

「あの騒ぎの間なら分らんけど、救急車が行ってからは見てないなあ。2人とも。」と源次郎が言う。

「ほな、集金に行ってくるわ。……えーと、領収書は、と……。」とつぶやきながら、美佐子は他の未納者を確認していく。

契約するときには、「原則として銀行引き落とし」と言うのだが、人にはいろいろな事情がある。

さらには、紹介してきた不動産屋の説明不足もあって、応じてくれない住人が多いのだ。

救急車で運ばれた向井のように、「分かりました」とは言ってくれない。したがって、毎月分を現金で集金することになる。これがまた手間なのだ。

「えーと、203号室の井田さん、それから208号室の吉宗さん、それから……。」

「ええから、はよ行ってこいよ。言うてる間に“脱走”されるで。」と源次郎が茶化すように言う。

「ほな、順にちょっと回ってくるわ。」と言って、美佐子が管理入室を出る。

階段を使って、2階へ向かっていく。

その後姿を見送ってから、源次郎は最後の「張り紙」を書き終えた。

「全部で7枚。あそこと、あそこに張って、それから……。」と頭で張り出す場所を確認する。

そのとき、源次郎の携帯電話が鳴った。着メロは「必殺仕事人」である。

相手を確認する。

「507 向井忠明携帯」とある。源次郎が設定した「居住者」のグループである。

「もしもし、管理人の吉岡ですが……。」と受ける。
向井本人からでないことは薄々感じている。

「もしもし……。」と女の声。

源次郎は、黙って耳を傾ける。

(つづく)

第1話 兄と妹 （その14）

「もしもし・・・あのう、507号室の向井ですが・・・。」
あの妹の声だと源次郎は思う。

「あっ、妹さん。向井さんのご様子はどうですか？」
とりあえずはそう切り出す。

しばらくは、向こうの電話口から、声がしない。病院の外から電話しているのだろう、車が走る音などが耳に飛び込んでくる。人が行き交う気配も聞こえる。なのに、相手は話してこない。

源次郎は、以前に行った事のある山王大学付属病院の玄関脇の駐車場スペースを思い出していた。

「携帯電話禁止」が徹底されているのだろうと想像する。病院内は職員から注意を受ける。公衆電話は病院内に設置されているが、狭苦しいのと、後ろに並ばれるので、落ち着いて話せないのだ。

彼女はここの電話番号も知らない筈だから、向井氏の携帯電話を持ち出したであろう。それに、場合によっては、ここ以外にも緊急の連絡をしなくてはならない可能性だってあったのだから。

そんなことを考えていると、電話口から、女の泣く気配が伝わって来る。

「もしもし、大丈夫ですか？」と源次郎が気遣う。

「駄目でした。・・・どうすれば、いいのか・・・。」と詰まる声が聞こえる。

「えっ！駄目だったって、まさか、亡くなられたってことじゃあないんですね。」

駄目だった、という一言で、結果が分かってはいたが、敢えてそのように問う。

「病院へ運んで、直ぐに先生に診て貰いましたけれど、手遅れだと・・・病院に着いたときもまだ息はあったんですが・・・。」
その後は女の嗚咽だけが響いてくる。

「本当ですか？」

そう言いながらも、源次郎はこの後のことを考えていた。

「それはお気の毒なことで・・・。」ところで、何かお役に立てることはありますか？」

と管理人らしい配慮を示す。

「あのう・・・。」

「はい。遠慮なく、何でも言ってくださいよ。」
またしばらく間があって、

「仙台に奥様がおられるんですね。」と女が言う。

「はい、確か、そのように聞いておりましたが・・・。」と源次郎が答える。

「そこに、電話して頂けませんか？管理人さんから電話して頂くわけには行きませんか？」と女は言う。

普通ならば、誠におかしな話である。

妹だと言うのであれば、実の妹であれ、義理の妹であれ、その実家の連絡番号ぐらいいは知っている筈である。仮に、今、手元にその番号を記したものがないとしても、管理人から電話をしてくれと頼むこと自体がおかしいことである。

それに、今、こうして話している携帯電話は向井氏が使っていたものである。そこには、実家の電話場号が登録されていて当然な筈。なのに、女は、そのように言う。

源次郎は、向井と一緒に飲んだときの彼の顔を思い出している。そして、彼が「男と男の話」として聞かせてくれたことも思い出している。

「分かりました。私からお電話いたします。ですが……。」
と、ここで頭を整理する。

電話の先で、女が次の言葉に迷っているのを感じる。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その15)

「奥様に電話して、お亡くなりになったという事実だけを申し上げればいいですよね。」

源次郎は、敢えて事務的に確認する。その方が良いのだと考えている。

「……ええ、……そうお願いできますか?……。」

女には、依然として迷いがあるようだ。そうして話している間にも、いろいろと頭を巡らせている様子が感じられる。

「ですから、あなたのことは触れないでおくほうがいいのですね。」

源次郎が、その迷いの先にあることを言う。

「・・・・はい、・・・・できれば・・・・そのように、お願い
できましたら・・・・。」

女は、途切れ途切れだが、源次郎の配慮に頷いてくる。

「分かりました。私のほうからご連絡は致します。ところで、これからどうなさるおつもりですか？」

•

•

•

•

•

•

•

•

•

女は答えない。

「では、取り敢えずは、一度こちらに戻っていただけますか？ これからのお話もありますし。」

源次郎は、あくまでも冷静に対応を考えている。総務部次長だった頃の顔である。

「……わかりました。そうします。」と女が答える。

「それから、病院には、今、家族と連絡を取っているから、これらの対応は少し待つように言ってください。決してあなたが動いちゃあ駄目ですよ。いいですか？それと、病院の事務局の電話番号を

聞いてきてください。奥様へも連絡する必要がありますから。いいですか？」

源次郎はしっかりと念を押す。

「はい、・・・はい、・・・。」と女は自分を納得させるように受け答える。

そこで、一旦電話が切られた。

源次郎は、窓の外を眺める。週末の温かな風が街路樹を僅かに揺らしている。

遠くを見るように、源次郎は動かない。手にしていた携帯電話を机の上にそっと置く。

暫くそうしていたかと思うと、「あったかなあ？」と呟いて机の引き出しを開ける。スチール製のビジネスデスクの乾いた音が響く。引き出しを目一杯に引き出して、奥まで手を突っ込む。

「あった！」と叫んで、そのものを引っ張り出す。使い古した名刺入れである。

源次郎は、その名刺入れをパラパラと捲っていく。

仕事をしていたときのものである。相手の業種別に区分されて、かつ会社ごとにグループ化してある。

「医療関係」と区分されたところを見る。順番に捲っていく。

「さ、さ、さ、・・・。」と「あいうえお」順に整理されたものを追っていく。

「山王大学付属・・・。」よし、あったぞ。」と呟いて、その名刺を取り出す。

医事課長の名刺である。

そうしておいて、今度は壁際に設置されたスチール棚を開ける。「

入居者カード」のファイルを取り出す。

「507号室 向井忠明」のカードを取り出す。

そのカードに記載された「緊急連絡先」の欄を指で押さえて、電話機の受話器を外す。

携帯電話ではなく、管理人室用の固定電話で掛ける。ダイヤルを順番にプッシュする。

無機質な接続音が聞こえて、コール音に変わる。1回、2回、3回・
・とその音の数を数える。

ポン、という音がして、相手が出る。

「お待たせいたしました。向井でございます。」と女の声。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その16)

「もしもし、私、大阪でマンション賃貸業をやっている吉岡と申しますが、奥様、良子さんはおられるでしょうか？」と源次郎は出来るだけゆつくりと話す。

「・・・・ああ、・・・・少々お待ちください。・・・・」と相手は電話口を押さえて、誰かと話をしている。どうも本人ではなさそうだ。

数十秒間の待ちがあつて、

「お待たせいたしました。向井良子でございます。」と相手が変わる。落ち着いた声である。

「奥様ですか？向井忠明さんの奥様ですね。」

「はい、そうですが・・・・・・」

「実は、突然で申し上げにくいのですが、向井忠明さんが先ほどお亡くなりになりました。」

「えっ！・・・・まさか！・・・・ど、どうしてですか？」

「実は、マンションのお部屋で倒れられてまして、私どもの方で救急車を呼んで病院へお連れしたのですが、間に合わなかったということでした・・・・・・。医師は脳溢血だと申しておりました。」

「・・・・・・」

「もしもし、大丈夫ですか？・・・・突然のことで、驚かれたと思いますが、取り急ぎ、ご連絡だけは・・・・と思ひまして・・・・」

源次郎は、相手の呼吸を計りながら、要点だけを伝える。

電話口で、「ガタン」と大きな音がした。受話器が宙を舞っているような感じがする。

「もしもし・・・・、もしもし・・・・。」と呼び掛けるが、応答がない。

「お母さん！」と叫ぶ声が電話口から聞こえる。

その後、何かをずらすような音がして、暫くは遠くで人が動いている気配だけが聞こえる。

「もしもし・・・奥様、大丈夫ですか？・・・」と再度、大きな声で問うてみる。

「もしもし、失礼を致しました。娘の佳代と申します。母はお話できる状況ではないので、私がお聞きいたします。」

声から察すると、最初に電話に出た女のようなうだ。

「父が亡くなったと言うのは本当ですか？」と確認してくる。気丈な感じがする。

「はい、先ほど、病院から連絡がありました。脳溢血だとのことですよ。お気の毒に。」

「では、父は今もその病院にいますと言うことですね。」

「はい、病院は、山王大学付属病院です。場所は・・・。」と続けようとしたが、

「とにかく、母は動けそうにありませんので、私がこれからそちらに向かいます。えーと、飛行機の手配もありますから、それが終わったら、改めてこちらからお電話させていただきます。今、お掛けになられている電話番号でよろしいですか？」

番号通知で発信しているから、それを識別できるというのであろう。とにかく、最低限の連絡だけはできたと源次郎は思う。

「はい、この番号で結構です。それと、念のために、私の携帯電話の番号もお知らせしておきます。いいですか？・・・。」と、相手がメモを取れる様子になってから、番号を伝える。

その番号を再度確認しあってから、電話が切れた。

「ふっ！・・・」と溜息が出る。「辛い話だから致し方ない」とは思うものの、やはりしんどかった。取り敢えずは、連絡を待つことになる。

急に、身体から力が抜けて、それまで立ったまま電話していたことに改めて気付く。

椅子に腰を下ろす。

その源次郎の肩に、誰かの手が静かに乗ってきた。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その17)

振り返ると、そこには妻の美佐子が立っていた。いつから居たのだろう？と源次郎は思う。

「そうなの、駄目だったのね。……………」と美佐子が呟く。

「びっくりするだろう！いつの間に……………」いつからそこにいた？」と源次郎が訊く。

美佐子はそれには答えないで、

「妹さんって、本当の妹さんじゃないみたいね。こんなこと言うの変だけど。」と続ける。

何件かは集金できたようで、金庫を開けて現金と領収書の控えを仕舞っている。

「今の電話、聞いていたんだろう？」と源次郎は話を逸らす。

「うん、はじめから全部じゃないけれど、あんたが大きな声を出した辺りからよ。聞いてたのは。」

と、金庫のダイヤル錠を回しながら、美佐子が答える。

「妹さんから電話があってね。それで駄目だったと聞いたから。取り敢えずは、実家の奥さんには連絡しなきゃあと思ってね。」

「うん、そうだろうと思って聞いてたわよ。それで、奥さんが来るの？」

傍の椅子を近くに寄せて、美佐子は源次郎と向き合うところに座る。

「いや、どうも娘さんが代わりに来るみたいだった。奥さんはショツクが大きいだろうしね。」

「また、向こうから、電話してくるのね。」

「ああ、そういうことになってる。」

「でも、困ったことになったわね。これで、あの部屋、後の入居者が来ないわよ。どうするの。」と美佐子はぼやく。

「まあ、それはこれから考えるさ。今、いくら考えたって、どうしようもないだろ。とにかく、区切りだけはしっかりとつけとく必要があるからね。」

「暢気なことだね。私の苦労も知らないで。」と美佐子のぼやきは続く。

「ところでさあ、……………」と美佐子が椅子についているキャスターを滑らせてくる。

二人の顔が30センチぐらいの距離までに接近する。

「妹さん、どうしてるの？まだ、病院にいるの？」と美佐子は声のトーンを落としてくる。

「まだ病院なのかもしれないけれど、後でここへ来てもらうことになってる。」と源次郎が言う。

「ふうん、そうなの……………」と美佐子は何らやら不満そうである。

「……………」

「ねえ、あんた、何か知ってるんじゃない？」と詰め寄ってくる。

「何かって、何だよ。」と源次郎は突き放す。

「あの妹さんって、本当は向井さんのこれだったんじゃないの？」と美佐子が小指を立ててみせる。

「そんな下品な言い方は死んだ人に失礼だろ。いい加減しておけよ。詮索は。」と源次郎は嗜める。

「はいはい……………」分かりましたよ。」と美佐子は引き下がる。だが、納得はしていない顔だ。

「それと、奥さんから、いや娘さんから電話があっても、あの妹さんのことは言うなよ。話をややこしくするだけだからかな。」と源次郎が念を押す。

妻の美佐子は仕事をてきぱきとするいい女なのだが、こと「噂話」になると、人が変わったようにしつこくなる。それを踏まえての注意なのだ。

「それぐらいの配慮は出来るわよ。いくら私でも。」と美佐子が睨む。

そのとき、源次郎の携帯電話が鳴った。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その18)

それは「向井忠明」からだった。いや、「向井忠明の携帯電話」からということになる。

「もしもし……。」と妹の声。

「お待ちしていましたよ。仙台の奥様には連絡しました。娘さんが来られるようですが。それと、病院の連絡番号は聞いて頂けましたか？」と源次郎は出来るだけ事務的に話す。

その方が、相手が楽だろうと思っている。

今後の連絡窓口となる担当部署の電話番号を聞いて、先ほど引っ張り出しておいた名刺のそれ照らし合わせてみる。変わっていないようだ。

「では、一度こちらへ来ていただけますか？」

源次郎は、仙台から来るであろう娘さんと、この妹を会わせるべきではないと思っている。自分の想定が仮に違ったとしても、向井に妹が居ないことを知っているだけに、無用な争いごとだけは避けるべきだと思う。

少なくとも市内にいるのだから、彼女への対応を先に済ませるのが当然だとも思っている。

「はい。これから直ぐに伺います。よろしくお願いします。」と言って電話が切れる。

「来るって？」と美佐子が確認する。

「ああ、これから来るそうだ。」源次郎が答える。

「じゃあ、準備だけはしておいてあげないとね。」と言って、美佐子は奥へ入る。

源次郎は名刺を見ながら、山王大学付属病院の医事課長、佐山泰助に電話を掛ける。

彼が今も在職しているのかどうかは分からないが、兎も角も電話を試してみる。彼が今もいるようだったら、話がしやすいと思っている。

電話をすると、佐山は去年の人事異動で代わったという。残念だが仕方がない。

簡単に要件を伝ええると、後任の田畑というものにつないでくれると言う。

「医事課長の田畑でございます。佐山部長のお知り合いでしょうか？」といきなり訊いてくる。

取り次いでくれた女性が、その辺りまで細かく伝えたのであろう。

「えっ！佐山さんは部長さんになられたのですか？」と思わず聞き返す。

「ええ、去年の1月に、事務管理部長に着かれました。私の直属上長となります。」と田畑という男が説明する。結構図太い声である。

「そうなんですか？知りませんでした。申し訳ありません。」と源次郎が謝る。別にそうする必要はないのだが、相手が勝手に「上司の知り合い」だと勘違いしてくれたことに、一抹の罪悪感がある。

「いえ、知り合いって言うほどのものではないのですが、以前に佐山さんにいろいろとお世話になったことがあります。……とこころで、……。」と今朝方搬送された向井氏のこと、大阪には仕事で単身で来ているが、家族が仙台から駆けつける予定だ、などの要点を伝えて、それまでは経費の精算などは待ってくれる様に頼む。

相手は、そのひとつひとつに「はい、はい」と返事をくれて、最後には「お任せください。きちんとさせて頂きますから。」と明言してくれる。

「では、ご家族が来られましたら、田畑さんのところへ行くように伝えますので。」と源次郎は礼を言って電話を切ろうとする。

「あっ！ちょっと待ってください。佐山部長にはご連絡があったことをお伝えしたほうがよろしいのでしょうか？」と田畑が確認してくる。

「いいえ、それは結構です。今回のバタバタが終わりましたら、改めて佐山さんにはご挨拶させていただきますので・・・。」と念押しする。

「分かりました。それでは、これで。」と田畑の方から電話を切る。

病院と言えども、やはりサラリーマンと同じだなあ、と源次郎はしみじみ思う。

(つづく)

第1話 兄と妹（その19）

買い物を終えたお竹さんが戻ってきた。

「美佐ちゃんいる？」と訊く。

「今、ちよっと、奥にいるけど・・・」と源次郎が言うと、

「まあ、源さんでもいいや・・・」と言いながら、指で、「事務所の中に入ってもいいか？」と訊く。

答えをしないうちに、よっこらしょ！という掛け声とともに、両手一杯の荷物とともに部屋に雪崩れ込んでくる。

「独りぶんなのに、随分と買うんだね。」と笑顔を見せながらあらう。

本当は、素直に自室へ戻って欲しいところだが、今朝の一件では世話になった借りもあって、そうは言えない辛さがある。

お竹さんは、そんな雰囲気ももろともせず、両手の荷物を床にどさっと降ろして、近くの椅子を引張ってきて、源次郎の横へ座り込む。

煙草を取り出して、ライターで火を付ける。

そして、美味そうに一服吐き出すと、おもむろに話し出す。

「ところで、向井さん、どうだった？連絡あったんだろ？ひよつとすると、ちと、危ないかも知れんとは思ってたんだが。」と言う。

流石に付添婦をしているだけのことはあって、病人の顔から判断するようである。

「いやね、それが駄目だったってことだ。さっき、妹さんから電話があった。」

源次郎が、棚の上から灰皿を取り出して机の上に置きながら、そう

伝える。

「そうか、やっぱ駄目だったか。もう少し早くに病院へ運べてたら助かったかも知れんが、あの顔色じゃあ、ちいと無理かいな、と思とった。」と、お竹さんは驚きもしない。

三口ぐらいしか吸っていない煙草を灰皿に押し付ける。それを、机の隅に寄せる。

「そりゃ、ご愁傷様やな。・・・ごちそうさん、ほな、上へあがるわ。部屋片付けるんだったら、声掛けてや。仕事やなかったら、手伝うで。」

お竹さんは、そう言ったかと思うと、また入ってきた時と同じように、よっこらしょ！と声を出して、両手で荷物を持ち上げて、身体でドアを押して出て行った。

よく気の付く、おばさんである。

ふと、源次郎がその後を追いかける。エレベーターの前で捕まえて、

「お竹さん、向井さんのことはあまりおおっぴらにしないで欲しいんや。」と小声で頼む。

お竹さんは、小さい身体なのに大きく首を縦に振りながら、

「それは心得とる。源さんのところの営業妨害にもなるしな。」としたり顔だ。

管理人室に戻ると、奥から美佐子が出てきた。

「あんた、今、お竹さんがいたやろ。」と言う。

「声が聞こえてたんか？」と訊くと、首を横に振りながら黙って机の上の灰皿を指差す。

なるほど、と源次郎は思ったが、美佐子はそんなことは意に介さないで、

「これからが大変やで。あんた、しっかりしいや。」と意味ありげな顔をする。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その20)

源次郎は、昨年の夏に町内会が主催した「夏祭り」のことを思い出している。

その夜、近くの公園で行われた「盆踊り」を美佐子と見に行ったのだった。

いや、美佐子は踊りに行ったと言う方が正しいのかも知れなかった。公園に着くなり、直ぐに町内のおばさん連中からお声がかかって、最初は尻込みを見せるものの、結果としてはその中心になって踊ります。

そして、それが毎年の形だった。

ひとり放り出されたようになった源次郎は、仕方なく、いや、これもそれを十分計算していて、と言うのが正しいが、男連中が屯している屋台をやっているテントの中へ収まる。

暑い日だったから、何よりも「冷えた生ビール」が美味しいのだ。

「やあ、やってるね。」と知り合いの顔に挨拶をする。

既に出来上がっている連中も居る。折角の浴衣が台無しとなるような奴も居る。

用意されていた床机に、上半身裸で、ビールを浴びるように飲んでいる奴も居た。

一番奥の床机が空いているのを見つけて、そこへ座る。

薬局の女将さんが、屋台を切り盛りしていた。

「お嬢、こっちにも生ひとつ!」と大声をかける。お嬢とは、小泉薬局の女将さんのあだ名である。

「はいよ！源さん。相変わらず美佐ちゃんは、これ一本かい？」と踊る仕草を真似る。

太っているから、まるで重戦車がでこぼこ道を走っているような格好に見える。

「あはは・・・。そのお陰で、こうして美味しさにもありつけるんだから、こっちは嬉しいけれど。」

と源次郎は茶化すように言いながら、差し出されたジョッキを受け取る。

重戦車がでこぼこ道を運んできたから、1／3ぐらいは零れて減っている。

それでも、こうした雰囲気が好きだ。大阪らしいと思う。

枝豆を片手に、三口ぐらいを一気に飲む。美味い！・・・この喉を通るとき感触は、ホントたまらない。

ふーっと息をつくとき、そこへ後ろから肩を叩く奴がいる。

誰かな？と振り向くと、そこには意外な男が座っていた。

それが、向井忠明であった。

「いつも管理人さんにはお世話になっています。とりわけ、奥さんには、いろいろとご厄介をかけまして。」と丁寧な挨拶をする。

「まあまあ、こんなところで固苦しい挨拶なんて、なしにしまへんか。」と源次郎はわざと碎けて返す。

それから、一時間以上、一緒に飲むことになった。床机に跨るようにして、男2人が向かい合う。

いろいろと話したように思う。互いに年齢が近いこともあったし、互いに中間管理職という共通点もあった。

周囲はドンちゃん騒ぎのようであったから、幸いにも向井と話しているだけで、他の連中が割り込んでこなかった。あまり酒量には自

信のなかった源次郎にとっては、ある意味救いの神だったかもしれない。

「管理人さん。良かったら、ちょっと、駅前までぶらぶら行きませんか？」と向井が言う。

「？」とは思ったが、折角ここまで話せたのだから・・・と同道することにする。

「ええですよ。ここは落ち着かへんしね。」と言うと、向井は少し笑ったように見えた。

それから、2人は並んでバス通りを駅に向かって歩き出す。

公園の喧騒が少し遠ざかったところまで来たとき、ふと向井が口にする。

「いいご夫婦ですよ。管理人さんのところは・・・・・・。」

何と答えようかと向井を見ると、彼の目が、どこか遠くを見ているような気がした源次郎であった。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その21)

「向井さんは、ご実家が仙台でしたかね？」

「はい。妻と娘が2人います。ひとりは、今は東京の大学ですが。」

「お仕事とは言え、単身赴任はしんどいでしょう？」

「いやあ、最初は慣れずに苦労しましたが、慣れてくるとそれはそれで何とかやれるものですね。」

「でも、寂しいって感じませんか？」

「うーん、それは確かに……。」

2人の会話は互いの本質を外さないで進んでいく。

男2人、夜のバス通りを並んで歩くのは、何となく滑稽なものだと源次郎は思う。

自分は浴衣だが、向井はゴルフに行くような格好である。良くは分らないが、恐らくはブランド物なのであろう。見ても、ピシッと決まっているような感じがする。

まるで異質な世界から来たような格好をした2人の男が夜道をぶらぶら散歩しているのだ。

これで、前から警邏中の警官でもくれば、明らかに「職質」を受けそうな気配である。

私鉄の駅前にある最後の大通りで、信号に引っかかった。

青信号が点滅し始めたとき、一気に駆け出せば渡れたと思うが、今夜は浴衣に下駄履きである。

無理して、途中でコケても格好が悪いだけだと思い直した。

「この信号を渡って左の奥にあるビルに、チョット知っている店があるの、そこでもよろしいですか？」

横断歩道のところで、向井が指をさして訊く。

「どこでも構いませんよ。でも、向井さんがこの辺りの店をご存知とは、驚きましたよ。」

源次郎は、正直、そのように思った。

向井はほぼ毎日、計ったように定刻に帰ってくる、と美佐子から聞いていた。

だったら、向井は酒や女などの遊びもしない男なのだと、源次郎は勝手に思い込んでいた。

大企業の部長クラスというのは、もっと派手に遊ぶものだと考えていたから、一風変わった男なのだろうと思っていたのだ。

でも、こうして、毎日通勤する経路に非常に近いところに飲む店を知っているというのだから、これは驚きに該当する。いつの間に、そのようなところを開拓しているのだろうと考える。

信号が変わって、横断歩道を渡る。

それから左へ折れて、今度は細い路地を右へ入る。

その一番奥に、4階建ての小さなビルがあって、そこへ向井は源次郎を案内した。

小さな、5人も乗れば一杯になるだろうと思われるエレベーターに乗る。

3Fのボタンを向井が押す。

ガタンと大きな音がして、ドアが閉まる。ウィーンという音を立てて、3階に着く。

そのフロアーには、小さな店ばかりが4軒入っているようだった。そのもつとも手前のドアを向井が開ける。

「管理人さんからどうぞ。」と言われて、源次郎が店へ入る。

入ったとたんに、「えっ！」と叫んで、足が止まった。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その22)

入ると、真っ暗なのである。

よく見ると、分厚い黒のカーテンがかかっているように見える。

棒のように突っ立っていると、その真ん中から、急に鋭い明かりが飛び出してくる。

そして、その光の中からいきなり、タキシードを着た男が出迎えに来る。

それを見て、源次郎はさらに引き下がる。

「向井さん、ここは・・・？」と後は声にならない。何か、とてもないところに来たような気がするのだ。

それを見ていた向井が、にこやかに笑いながら源次郎の背中を押す。

その真っ黒なカーテンのようなものを割って入ると、そこはシックなバーのような雰囲気である。

源次郎は、自分の浴衣姿とのアンバランスを痛感する。

「まあまあ、管理人さん、取り敢えずはお座りくださいな。」と向井はボックス席に案内する。

言われるままに座ると、その席も非常に高級感のあるソファの感触である。

天井には、ミラーボールというのだろうか、あの独特の光を反射させて輝くものがある。

高そうだな、と源次郎は思う。

いつの間にか、傍にいる筈の向井の姿がなくなっている。

ブレンダーかウイスキーなのかはよく分からないが、ボトルを載せたセットが運ばれてくる。

運んできた黒服の男に、源次郎が小声で尋ねる。

「いま一緒に来た人は？」

黒服の男は、笑いながら、「ジョージさんなら、今、衣装に着替えていますので・・・」と言う。

「はあ？ジョージ？衣装？・・・何のこっちゃ！」と源次郎には訳が分からない。

「お水割りでよろしいでしょうか？、それともロックになさいますか？」と黒服の男が訊ねてくる。

「ああ、水割りで・・・」と源次郎は適当に答える。

それよりも、ここがどのようなところなのかが気になって仕方がないのだ。

黒服の男が去った後は、暫くは誰も近くに来ない。

暗さに目が慣れてくると、辺りが多少は見えてくるようになった。

どうやら、本当に小さな店ではあるようだ。今、源次郎が座っているボックス席と、奥にあと2つのボックス席が見える。一番奥の席には男女が座っている。カップルなのか、女がこの店の子なのかは分からない。

源次郎の正面にはカウンターが見えて、そこにはバーテンダーらしき男がひとりいて、何やら動き回っている。

右手にはどうやらドラムセットが置いてあるようだ。その辺りだけが、少し高くなっている感じがする。

仕方がないので、作ってもらった水割りを口にする。

「旨い！」と思う。あまり飲める方ではないが、サラリーマン時代に多少はこうした高級な酒を口にした記憶がある。口当たりがまろやかなのだ。

「どうですか、お口に合いましたか？」

振り返ると、そこには向井が立っていた。

上は、フリルのついた銀色のシャツ、そして、下は細い黒のズボンである。

ぽかんと口を開けた状態で、目だけで向井の姿を上から下へと往復する。

「申し訳なかったですね。驚かせるつもりはなくて、ここへ来るまでに何度となくこの話をしようかと思ったんですが……。つい、言いそびれたままで。」

「向井さん、ここはどういったお店なんですか？」と源次郎は訊きたくてしょうがなかったことを訊く。

「あははは……。実はね、私、ここで遊んでいるんですよ。いわば、私の遊び場なんです。」

「……………」

そう、言われても、何のことだかまだ分からない。

向井が横に座ってくる。

「ここはね、ジャズバーのようなところです。あそこにドラムセツトが置いてあるでしょう。あれが私の遊び道具なんです。」とテーブルの上で、ドラムを叩くマネをしてみせる。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その23)

「ジョージさんと、さっきの若い子が言っていましたけど……。」
と源次郎が確認する。

「ああ、ジョージというのは私の名前。シルバー・フォックスではそう呼ばれています。」

「そのシルバー……何とかというのは？」

「バンドの名前です。私が参加しているジャズバンドの。シルバー・フォックスと言います。少しだけカッコいいでしょう？」

源次郎は、頭がくらくらしてくる。

「と、言うことは、向井さん、ジャズをおやりになってるってこと？」

「はい。でも、あくまでも遊びですよ。仕事ばかりじゃ、人間、息詰まりますからね。」

「いつから？」

「それは、ジャズドラムを始めたことですか、それとも、この店でのこと？」

「いやあ、両方とも。……想像もしてなかったものなあ。」

向井は、笑顔で話している。マンションで顔を合わせることも幾度となくあったが、今のような、少しやんちゃ坊主のような、心底から楽しんでいる風な笑顔は初めて見る。

源次郎は、改めて「人は見かけによらない」ことを実感する。

「じゃあ、その話は後ほど詳しく。管理人さん、まあ、ゆっくり飲んでください。どうやらメンバーが揃ったようなので、ちょっとばかり、遊んできますから。」と向井が立ち上がる。

「その、管理人さん、というのはやめて貰えませんか？どうも、この

ようなお店では格好が付きにくいですよ。」

「あっ！そうですね。これは失礼をいたしました。では、吉岡さん、でよろしいでしょうか？」

あくまでも、向井は楽しそうである。

向井が黒いカーテンの向こうに姿を消してまもなく、店全体の照明が落とされたような気がした。
と、いきなりスポットライトが灯されて、その眩さの中に、ジャズバンドが出現する。

後ろのボックス席から大きな拍手が起きる。

源次郎も慌てて、拍手を送る。

中央に立った男が、マイクを握る。

「ナニワのジャズスポット『ブルータス』へようこそ。今宵は、我がシルバー・フォックスがお相手いたしますので、最後まで存分に酔いしれていただきたいと思います。」

ひとり、ふたり・・・全部で5人のバンドらしい。中央の奥に、向井さん、いやジョージさんのドラムがでんと座っている。

そのジョージさんが、ドラムスティックを合わせて、「カン・カン・カン」とリズムをとる。

そして、演奏が始まりだす。

申し訳ないが、源次郎はジャズは全くの門外漢である。

今、演奏されている曲も、どこかで聴いたことがあるような気はするのだが、曲名などは一切分からない。

ただ、リズムだけは何となく身体に心地よく響いてくる。

とりわけ、向井さん、いやジョージさんが叩いているドラムの音は、

床を這うように伝わってくる。

旨い水割りをちびりちびりやりながら、そのジャズの世界なるものに浸り始めている。

目は、ドラマーだけを見つめている。何とも心地よいものだ。今まで、ジャズを改めて聞くようなことはなかったが、これはこれで、素敵な世界なのだ、と思えるようになっていく。

1曲目が終わったようである。後ろのボックス席やカウンター席からも拍手が起こった。

源次郎も、慌てて拍手を送る。

気がついたら、すぐ後ろのボックス席にも4人の客が座っているし、カウンター席もほぼ満席の状況である。そうした中で、たった一人で、ボックス席を占領しているのが何となく心苦しくなってきた。

そして、次の曲がはじまったようである。また、大きな拍手が巻き起こる。

(つづく)

第1話 兄と妹（その24）

2曲目は、最初の曲よりアップテンポのようだ。

これまた、曲名も知らないが、どこかで聴いたことのある曲である。

相変わらず、床を這って、向井さん、いやジョージさんが叩くドラムの音が響いてくる。

腹に入ったアルコールを攪拌されているようで、まことに心地がいい。

周りの客は、皆、足や身体でリズムを執っている。さらに客の数が増えているようで、知らない間に、源次郎が座っているボックス席にも後2人座っている。

どうやら立ち見までいるようで、カウンターの周囲には、大勢の男達が立ったままで手を叩いたり身体全体でリズムを執ったりしている。

狭いのだが、ざっと数えても40人以上の客が入っているようだ。まさに、店全体が共鳴しているような錯覚に陥る。

ようやく2曲目が終わった。

盛り上がった店内からは、騒然とするほどの大拍手である。もちろん、源次郎も拍手を送る。

同じボックス席にいた男女が立って拍手する。

辺りを見ると、どの席の客も立ち上がっている。

傍にいたひとりの女性が、「あなたも立って！」というように手で催促する。

源次郎も、立って拍手を送り続ける。何か、夢を見ている様な感じ

がする。

最初にマイクを握った男が、再びマイクを握る。どうも、彼がリーダーらしい。

「では、ここで、一服・・・ではなくて、・・・」と笑を取る。メンバーを紹介すると言う。向かって左から、順に担当している楽器と、その奏者の名前を呼び上げる。

それに呼応するかのように、各人が、少しだけ楽器の音を出して、軽く一礼をする。

そして三番目に、向井さん、ではなくて、ジョージさんが紹介される。

軽く、ドラムを叩いて、一礼する。その笑顔がとても美しいと源次郎は思った。

すべてのメンバー紹介が終わったら、最後の曲を演奏するという。店内のあちこちから、いろいろな曲名が叫ばれているようである。つまり、リクエストをしているのだと、源次郎は思った。

「凄いんだなあ。これだけのお客が、彼らのレパートリーを知っていて、その中から自分が聴きたい曲を叫んでいるのだ。ちよつとや、そつとのグループで、こなせることじゃない。」

ジャズは分からないが、テレビなどでやっているのを見ても、こうしたリクエストに即座に答えられるバンドは少ない筈だと思う。

「こりゃ、相当なもんだな。」

源次郎の中に、向井への尊敬の念が大きくなっている。

555
(5)

第1話 兄と妹 (その25)

リーダーの男が、何やらメンバーに指で合図を送っている。
どうも、最後の曲を決めたようである。

メンバー全員が、各々頷いて、それぞれの楽器の音をその曲に合わせている。

ちょっとした静寂の間があってから、いきなりサックスの音から入ってくる。

その第一音が響いただけで、客達はまた、立ち上がって拍手する。
曲が分かったらしい。

その曲に呼応する。

もちろん、源次郎には「曲名」などは分からない。しかも、今度の曲は、聴いた記憶がないのだ。

でも、周りに合わせるように、これまた立ち上がって拍手を送る。

サックスだけの音から始まって、次第に楽器の数が増えていく。それとともに、テンポも加速していくようだ。

客の反応も、それに添うように、そのボルテージが高まっていく。

そのうちに、客の誰からともなく、足踏みをし始める。

源次郎も同じようにしようと、一旦は足を軽く揚げて下ろしたが、違和感があってそれだけは自粛する。

何しろ、下駄履きである。

源次郎は、自然と笑がこみ上げてくる。

それは、自分のカッコウにではない。

ついぞ、1〜2時間前までは、大企業の部長さんだと思っていた向

井という入居者。その男が見せた全く別な顔。それに付き合っている自分。そのすべてに、なぜかしら、笑がこみ上げてくるのだ。

曲のクライマックスが来たようである。

店中で共鳴する雰囲気から、源次郎でさえも、それを感じられる。階段を1段1段昇るように、客の興奮度も上昇している。

そして、曲が終わった。

嵐のような拍手である。

当然、源次郎も最大の賛辞を込めて、拍手を送った。

どよめきが漂うように、それでも、潮が次第に引いていくように、静けさがやがて戻ってくる。

源次郎も、他の客に合わせるようにして、ボックス席に身を沈める。

「いやあ、興奮するもんだなあ」と声が出る。

喉の渴きを覚えて、手元にあった水割りを一気に飲み干す。改めて、あの「旨さ」が喉に沁み込んでくる。

「同じものでよろしければ、おつくりしましょうか？」と声がかかる。

見ると、同じボックス席に座っている女性が源次郎のグラスを指差している。

30歳ぐらいの綺麗な女性である。美人なのだ。

慌てて、お願いします、と答える。

そう言えば、演奏中に源次郎に「あなたも立って・・・」と催促の仕草を送ってくれたのも、どうやらこの女性だったような気がする。

この店の女の子なのだろうか？それとも、お客の一人なのだろうか？

源次郎には、想像も付かない。

「お見かけしないお顔のようですけれど、今夜はおひとりで？」と言いながら、作った水割りのグラスを源次郎の前においてくれる。

「いや、……あの……、ジョージさんって言う方に誘われまして……」と吃るように答える。

「えっ！……あの、その、ジョージさんのお知り合いですか？お友達なんですか？」とびっくりしたような声で詰め寄られる。

源次郎は、まるで豆鉄砲を食らった鳩の心境である。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その26)

今、思い出しても、身震いするぐらいだ。

そのあと、その女性から「如何にジョージさんのドラミングが素晴らしいか」を切々と聞かされた。

門外漢だとは言えないで、まるで小学校の生徒のように、ただ「はいはい」と聞いていた。

しばらくして、最初の黒服の男が来て、「ジョージさんが表で待っておられるそうですから・・・」と出口まで案内してくれた。助かった。

出ると、そこには元の服装に戻ったジョージさん、いや、向井氏が爽やかな顔で待っていてくれた。

「ゴメンナサイね。席までお迎えに行くべきだったんですが、彼女がおられたもので。彼女に捕まるとそうそう帰れなくなりますからね。」と笑う。

「ファンだとかおっしゃってましたけど・・・」

「確かにね。ありがたいのですが、・・・」と向井氏は言葉を濁す。

その帰り道である。

また、男2人が、来た道をマンションへ向かって帰る。

「私の家内はね、今の社長の一人娘なんですよ。」
突然のように向井が話し始める。

「ほう、それは凄いですね。」

「いやいや、そのお陰で、今大阪にいるのです。」
「それって、本当は……ということですか？」

向井は頷きながら、言葉が続ける。

「社長は、私の為に良かれと思つてのことなのでしょうが、本当はね、私は仙台支店長で定年を迎えたかつたんです。何も、大阪本社に希望はなかつたんですが、やはり娘が可愛いのでしょね。本社の部長で退職すれば、子会社の役員のポストが待っているんです。それが、我が社の決まりごとなんです。それを叶えてやるというのが、社長の意向でした。」

「でも、普通のサラリーマンからすれば、うらやましい話ですよ。どうして？ 向井さんは、役員に未練はなかつた？」と源次郎が訊く。

「そうですねえ。未練などはなかつたですよ。それよりも、それこそ第二の人生。チャレンジしたいことがあつたんです。それが、あのジャズなんです。」

向井は、そのように説明をする。

「私はまったくの門外漢で分かりませんが、あの女性などは、すばらしい、プロになれる、などと言つてましたよ。」

「まあ、その言葉が相当かどうかは別にして、確かにジャズドラマーとして、やり直してみたかつたのは事実ですね。だから、大阪に転勤してきてから、いろいろと探して、あのグループ、シルバー・フォックスに参加したんです。彼らは、私が参加する以前から、セミプロとして有名でしたからね。是非参加したいと、オーディションを何回も受けに行きました。4回ぐらいダメ出しされましたよ。それでも食らい就いて、5回目に、ようやくOKを貰つたんです。そりゃあ、嬉しかったですよ。」

「じゃあ、向井さんは、今でも定年退職後はジャズを本格的にしようと思われているのですか？」

源次郎には、納得が行かないのだ。大企業でそれなりのポストに就けば、定年後は関係会社への再就職が約束されているということとはサラリーマンならば誰でも知っている話だ。自分のように、中小企業のレベルではそのような厚遇は期待できないから、さすがは大企業だと実感する話である。やはり大企業は違うなあと、その格差に愕然とするのだ。

その「喉から手が出る」ほどの良い話を、この向井は自らの意思で蹴るという。

サラリーマンを経験した人間からすれば、まさに「馬鹿な奴」だと言ふことになる。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その27)

「でも、奥様はどのように言われてるんですか？」と源次郎は訊く。

仮に、もし仮にだ、自分がこの向井の立場だったら、美佐子はどう言うのだろうと考える。

「何、つべこべ言ってるの。男は仕事が一番でしょ。折角、会社が役員のポストをやるって言ってくれてるんだから、それはありがたく頂戴すべきよ。それだけ、あんたが会社に貢献してきたってことなんだからね。しっかりやんなさいよ。」
ってことになるんだろうな、と思う。

源次郎が退職したとき、「どっか、世話してもらえないの？」と厳しいことを言ってたのだから、そう言うに決まってるよな、と思う。

「そりゃ、当然、子会社の役員に就くだろうと思っっていますよ。会社の事情は、よく知ってますからね。」

向井は、はつきりと言う。

「でも、向井さんは、ジャズがやりたいんでしょう？それって、難しいことですね。お立場もあるでしょうし。」

源次郎は、少し同情する。

折角の「安泰」を断るのは『明らかな馬鹿』との思いは確かにある。だが、こうして話を聞いていると、ましてや先ほどの店でのことを考えると、「俺でも迷うな」と源次郎は思うのである。

趣味である。確かに、「ジョージさんの趣味」なのだ。

彼は、あの店を「遊び場」だと言った。演奏しているとき、如何にも嬉しそうだった。

多分、大学を出てからは仕事一筋に打ち込んできた筈だ。若いときにも、既にその将来性を高く買われていたに違いない。そうでなければ、上司の一人娘と結婚なんかできるものではない。

その間は、彼はジャズという趣味を、ドラムを叩くという喜びを、封印し続けて来たに違いない。

そうした中、定年退職という節目を見据えたこの時期になれば、ふと「遊び心」が頭をもたげてきても、誰も非難すべきではないような気もするのだ。

「私の腹は決まっています。」

向井は強く言う。そして、言葉を続ける。

「大阪本社に来て5年です。でも、本当に仕事らしい仕事はしてないですよ。ポスト待ちのポスト。社内では“春休み組”と呼ばれているんです。4月の新年度になったら、新たなところへ旅たつ奴らだと思われているんです。誰も、本格的な仕事をさせようとは思っていない。」

「うーん。それは、ある意味少ししんどいですよね。」

源次郎は分かる気がする。例え規模は違っても、同じサラリーマンの世界である。俗に言う「窓際」と呼ばれる人たちの存在も肌で感じるものがあった。

「何度も社長から呼ばれましたよ。どこにするんだってね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「その都度、もう少し考えさせて欲しい。それで、逃げてきたんです。毎年。」

(づ)く

第1話 兄と妹 (その28)

「でも、もう限界です。これ以上、引張れませんよ。」と向井は言う。

源次郎は、答えようがない。

サラリーマン社会の構図も分かっている。会社が用意してくれた定年後の再就職を断ることが、どのようにキツイことなのかも理解できる。

それでいて、「やってみたいことがある」という向井の心情も、同じ男として、それなりの理解がある。

そこまで聞かされていて、さきほどの向井が言った「腹を決めている」ことがどちらの道なのかを訊くことが出来ない。

来るときよりも、より一層暗くなった夜道を、2人が歩く。

「今頃、こんなことを訊くのは可笑しいんですけれど……どうして、私を、今日あの店に誘われたのですか？」

黙っているのが苦しくなって、源次郎が尋ねる。

少しの間があってから、向井が話し出す。

「そうですね。それも遊び心と言ったら、怒りますか？ ……実は、今日はあの「夏祭り」にちょっとだけ顔出したら、直ぐにあの店に行くつもりだったんです。」

「はい。」

「そうしたら、たまたま管理人さんとお会いしました。ちょっとお酒を飲んで、いろいろお話をさせていただきました。」

「はい。」

「そうしたら、何か、あの店での私を知っておいて欲しくなったんです。可笑しいでしょう？」

「うーん、でも、どうしてこの私だったんです？」

「それは、自分でも分かりません。ただ、何となく、わかってくれそうな人だと感じたのかも知れませんね。勝手に決めちゃって、申し訳なかったですが・・・。」

「それはいいんですよ。私も貴重な経験させてもらったんですから・・・。」

小さな交差点で、信号が赤になる。

向井がポケットから煙草を取り出す。

「吸いませんか？」と源次郎にも勧める。

「いえ、辞めたもんで。退職を契機に。家内がうるさくってね。」と源次郎は断る。

「そうですか、お辞めになったんですか。私と、逆ですね。」と向井が笑う。

「本社に来てから、また吸い始めたんですよ。一度は、辞めてたんですが。」と向井は旨そうに煙草を吸って、言葉を続ける。

「一日、何もないところでじっとしていると、どうしても我慢が出来なかったですね。時間が有り余っていますから、どうしても喫茶店に行く。行くと、煙草の匂いが懐かしく思うんですよ。それに、横で旨そうに吸われると、もう駄目でしたね。本社に来て、1ヶ月でまた吸っていましたよ。」

なるほど、と源次郎も思う。

在職中から、何度も美佐子から「禁煙」を求められていた。

それでも、辞められたのは、退職後である。やはり、周囲の環境が影響する。

信号が変わって、また歩き出す。

向井は、ポケットから携帯式灰皿を取り出して、その中へ煙草を放

り込む。

「ところで、今日の話は、是非、管理人さんの胸だけにしまっておいてくださいね。勝手に引張っておいて、こんなことを言うのは身勝手だと思われるでしょうが。」

「分かりました。」と源次郎は、自分の胸に手を当てる。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その29)

「今日は、とても嬉しい日になりました。管理人さんのお陰で。」
遠くに、「夏祭り」の会場である公園の灯りが見えるところまで来たとき、向井がポツリと言う。

「いえいえ、私も勉強になりましたよ。少し、カルチャーショックがきつかったような気がしますけれど。」
源次郎が笑顔で答える。

「また、お時間があれば、覗いてやってください。あの『ブルータス』という店で、毎週土曜日の夜、ドラム叩いてますから。」
向井は、ドラミングのマネをする。

「練習も大変でしょう？どこでされているんですか？」と源次郎が訊く。

毎日、定刻のように帰って来る向井に、そんな時間があるのだろうか、と素直に思う。あそこで、あれだけ演奏するには、それなりの練習が必要だろう。レパートリーも相当あるようだったし。
もちろん、マンションの部屋にはそれが出来るだけの防音設備もないから、自宅でやれる筈もなし。

「はい。本当は、毎日集まって練習できれば最高なんですけど、皆、それぞれに仕事を持っていますからね。集まるだけでも大変なんです。演奏だけで食べているのは、リーダーの高鳥さんだけです。」

「ほう、マイクを持って話されていた方ですね。」
「そうです。彼は、シルバー・フォックスだけではなく、他のバンドもやっています。自宅で子供達に音楽を教えたりもしているそうです。それでも、決して楽ではないと笑っていますよ。」

「他のメンバーの方は、他にお仕事をされていて、趣味で参加されている？」

「そうです。でも、殆どは、定職ではないです。ジャズをやるために仕事をしているって言うのが本音ですね。ですから、時間が空いたときに、高鳥さんの自宅まで行って練習するんです。運がよければ、メンバーが揃いますが、ほとんどは誰かが欠けますね。」

そこまでで、源次郎は、彼らが如何にジャズの演奏に拘っているかが分かったような気がする。

「じゃあ、向井さんも、よくそのリーダーの方のご自宅行かれるのですね？」

少し考えるようにしてから、向井がそれに対して答えてくる。

「そうですね。毎朝通ってるんです。奥様にはご迷惑なんです。」

「えっ！毎朝ですか？それから、お仕事へ？」と源次郎は素っ頓狂な声で訊きなおす。

確かに、向井が出勤していくのは源次郎がジョギングに出た直ぐ後だと美佐子が言っていたことがある。

大企業の部長さんも大変ねえと話していた。

そうなのか、それで・・・と源次郎は納得する。

「朝、6時半ぐらいから2時間弱ですね。練習するのは。それから、会社へ直行です。体力的にも多少キツイところもありますが、やはり好きなんです。苦にならないです。」

向井は笑って話す。

その横を、一台のオートバイが2人を追い抜いて行った。

50メートルほど先で、そのオートバイが停まる。全身黒ずくめで、

フルフェイスのヘルメットを被ったライダーが、振り返るようにしてこちらを見ている。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その30)

その全身黒ずくめのライダーは、2人を待つように、ゆっくりとオートバイから降りる。

暗くて、よく見えないのだが、どうも250CCはありそうなバイクである。

そのバイクに追い抜かれてから、向井が話さなくなっている。

知り合いなのかな？と源次郎は思う。それでも、それを訊く雰囲気でもなさそうなのだ。

向井が、黙ったまま、そのバイクに向かって歩いている。

30メートルぐらいまで近づいたとき、そのライダーがフルフェイスのヘルメットを脱いで、脇に抱える。

「あっ！女性なんだ」と源次郎は思った。

顔かたちまでは分からないが、肩口までの髪を振りほどくのが見える。

そう思っただけ見るせいか、ピッタリとしたライダースーツには、女性独特の柔らかなラインが浮き出ているような気もしてくる。

源次郎は足を止める。そうするべきなのかな、という直感があつた。

明らかに向井とその女性ライダーは互いを認識しあっている。互いに声も掛けていないが、その分、言葉ではない何かで会話しているような気がするのだ。

ふたりの距離がなくなった。二言三言、言葉を交わしたようである。

源次郎は、後片付けがされようとしているであろう「夏祭り」会場の公園の方向を向いている。

このまま、「じゃあ、私は祭りの後片付けを手伝いますから・・・」と声を掛けて離れるべきかな、とも考えている。

「管理人さん！ちょっといいですか？」と向井が声を掛けてくる。そして、手招きをしている。

源次郎は、慌てて身だしを整える。と言っても、何しろ浴衣姿である。胸元をちよっとだけ掻きあわせて、裾の状態を確認するように手で押さえるだけである。

それでも、そのライダーが女性であるという意識が、こんなおっさんにもそのような行動を取らせていた。

ふたりに近づいていくと、

「こちら、病院で看護師をされている小暮さん。そして、こちらが私の部屋の大家さん、吉岡さんです。」と向井が両方をそれぞれに紹介してくれる。

互いに、顔を見合わせて、「よろしく」とだけ挨拶する。

わあ！美人だ、と源次郎は思った。

さきほど行った「ブルータス」で会ったあの女性も美人だったが、目の前の女性も、また別の意味で美しい。どうして、この向井の周りにはこのような美人が集まるのだ、と変なやつかみすら出てくる。

「それでは、これで失礼します。」と美人ライダーがぺこりと一礼する。

そして、またフルフェイスのヘルメットを頭からすっぽりと被って、

乗ってきたバイクにヒラリと跨る。

そうしてみると、やはり男か女かは区別が付かない。

向井が軽く手を上げると、それに答えるように、エンジン音を響かせて、バイクが走り出す。

あっという間に、見えなくなった。

ふと気付くと、向井の手には、小さな紙袋が握られている。

源次郎がそれに気付いたことを察してか、向井が、

「これね、持病の薬なんです。連絡したら、彼女が届けてくれたんですよ。月曜日でも間に合ったんですが。」と説明をする。

「親切な病院ですね。」と源次郎が応じる。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その31)

「でも、持病って、どこがお悪いんですか？とてもお元気そうに見えるんですが。」と源次郎が続ける。

「ええ、ちよっと糖尿病の気があるのと、血圧が少しばかり高いもので。これは、もう10年以上も付き合っているんですが、なかなか改善しませんね。医者に言わせると、贅沢病だなんてね。」

と向井は軽く笑いながら答える。
そして、

「ある大学の付属病院で診てもらってるんですが、彼女はその看護師さんだった人なんです。」
と付け加える。

「ん？・・・過去形か？」と源次郎は思った。

「じゃあ、わざわざ、病院まで取りに行っただけで居てくれているんですか？」と素直な疑問を投げる。

一瞬、向井が源次郎の顔を見た。

「ええ、まあ、そうなりますね。」と向井は言葉を濁す。

「要らんことを訊いたかな？」と源次郎は反省する。人にはいろいろとあるのだから、触らないでおくのが良いことも沢山ある。そのひとつかもしれない。

そうした思いもあって、源次郎は別の話題に切り替える。

「ところで、向井さんのご両親はお元気なんですか？」

どうでもいいようなことである。いや、そのつもりであった。
ところが、向井の答えは、

「いえ、早くに亡くなりました。私が中学のときに、交通事故でね。」

即死だったそうです。」

「そうですか、それは要らんことを訊きました。」

「別に構いませんよ。隠すことでもないし。それで、私は祖母の家に引き取られて大学まで行きました。祖母には迷惑を掛けたと思ってますよ。その祖母も私が就職した翌年に他界しましたが。」

「じゃあ、ご兄弟は？」

「私は一人っ子でしたから。ですから、祖母亡き後は、養子に行くことも厭わなかったんです。」

「そうですか、ご養子さんにねえ。人には、表を見ただけでは決して分からないその人だけの歴史ってものがあるんですよね。」

源次郎は、まさにそのように思った。

今日の夜、ちよいと「夏祭り」を覗きに出ただけである。冷えたビールを近所の連中と軽く飲みたいと思つての顔出しであつた。

それが、向井と床机を跨いで飲むことになって、そして、駅前「ブルータス」へ連れて行かれて、そこでジョージとなつた向井を初めて見て、帰りには、美しいライダーとの密会（？）にも出くわした。

さらには、僅かだが、向井の生い立ちまで聞かされたのである。

向井の意図がどこにあるのかなどは、もうどうでもよいと思う。ただ、今日を境に、向井という人物の存在をより身近に意識できるようになったと感じるだけである。

（つづく）

第1話 兄と妹 (その32)

「あんた、電話鳴ってるで。何、ぼくつと、しとるんや。」

美佐子の大きな声で、源次郎はハッ！と我に帰る。

気付くと、机の上の電話が鳴っている。事務所用の電話である。

いつもは美佐子が出るのに、どうして今日は俺なんだよ、と思ったが、そうなのだ、仙台からの電話がある筈だった。

それを俺はここで待っていたのだ。

「はい、ミサコーポ、吉岡です。」と電話を取る。

掛けてきたのは、果たして仙台の向井の娘さんである。

14時40分仙台空港発の飛行機が取れたので、16時ちょっと過ぎには大阪伊丹空港に着けるとのこと。

「大阪へ着いたら、まずは父に会いたいのですが・・・。」と娘さんが言う。

源次郎も、それが順当だと思って、病院の名前と所在地を言う。相手がメモしているのを確かめるように、ゆっくりと繰り返して伝える。

「控えられましたか？」

「はい。ちゃんとメモしましたから。」

「伊丹空港からですと、そのままタクシーに乗られたら、30分ぐらいで病院まで行けると思います。病院へ行かれたら、医事課の田畑課長を訊ねてください。私のほうから、一応の話だけはしておきましたから、ちゃんとした対応をしてくれると思いますよ。」と源次郎が補足する。

「ご迷惑をお掛けしますが、よろしく願いいたします。あっ！それと、ですね。母も行くと申しておりますので、一緒に参ります。病院の手続きが終わりましたら、そちらの父の部屋へも参りたいと思います。遅くなるとご迷惑でしょうね。」

「いえ、このような事情ですから、何時でもお越しくださって結構ですよ。事前にお電話くだされば。」

正直、源次郎はそうしてあげるのがせめてもの慰めだろうと思っている。

「あとう、ご迷惑をお掛けした上に、さらにこんなことをお願いするのは身勝手で大変心苦しいのですが、そちらでの父の暮らしぶりなど、ご存知の範囲で結構ですので、お聞かせ願えないでしょうか。」

と切り出してくる。言葉を選んではいるが、明らかに「父の現状」を知らない様子である。

恐らくは、奥様の強い意志がそこにあるのだと思う。

「・・・と申されても、ですね。私は単なるマンションの管理人ですからね。皆さんの生活されている状況というのは存じ上げないんですよ。ホント、お役に立てなくて申し訳ないのですが・・・。」

源次郎は、一応の建前論を述べておく。

確かに、相手は向井の娘さんなのではあるが、まだ会ったこともない相手に、そうそう実際の話ができる筈もない。

電話の向こうでは、少しの間考えるような間があったが、

「いえ、結構でございます。お手数をお掛けいたしました。では、お言葉に甘えまして、夜には一度寄せて頂きたいと思います。事前にもたご連絡差し上げますので。」と電話が終わる。

「あんた、ホント、女の人には優しくできるんだねえ。」と美佐子は皮肉った言い方をする。

「だから、お前にも優しいだろう？」と源次郎が切り返す。

そこへ、今度は源次郎の携帯電話が鳴る。「向井忠明」からである。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その33)

「吉岡です。」と電話に出る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」 相手はなかなか話し始めない。

「今日、夕刻に、仙台から奥様と娘さんが大阪に来られることになりました。えーと、取り敢えずは病院へ行かれてから、こちらのお部屋にも寄られるとのこと。多分、大分遅くなってからだろうとは思いますが。」

源次郎は、相手が誰だか分かっていて、簡単に要件だけを一方的に話す。

この「向井の妹」と名乗る女性は、ここに来ようとしている筈。ただ、それを躊躇させる何かがある。

詳しいことを詮索するつもりはないが、少なくとも、正々堂々と向井の妻や娘と顔を合わせられる立場でないことだけははっきりと分かる。

それだけに、源次郎としては、仙台から家族が到着するまでに、その何かを解消させておく必要があるだろうと、漠然と考える。それが故の、連絡である。

そこまでを聞いて、ようやく女が話し始める。

「これから、お伺いしたいと思います。よろしいでしょうか？」

時計を見ると、午前11時前である。

「いいですよ。どれぐらいのお時間になりますか？」と源次郎が確認する。

「20分ぐらいで行けると思います。」

「では、来られたら、管理人室においでください。お待ちいたしております。」

電話が切れると、それを待ちかねていたように美佐子が傍へ来る。

「もう20分ぐらいで来るそうだ。」と感情を入れないように源次郎は話す。

「じゃあ、そのとき一緒に部屋へ上がるわ。換気のために、ベランダ側の窓、開けたままにしてあるから。」と美佐子が言う。

美佐子は、幾つかのペーパーバッグと新聞紙の束を奥から出してくる。

「それは？」と源次郎が尋ねると、「もちろんあの妹さんに上げるの。いろいろとき、持って帰りたいものがあるだろうしさ。」と美佐子が分かったことのように答える。

「ねえ、向井さんの部屋に、夫婦茶碗があつたのよ。きっと、彼女のやろうし、だったら、他にもいろいろとあるやろし？女にはね、女でないと分からないことがあるんやよ。」

そんなものか、と源次郎は思う。ただ、こうした人への配慮だけはしっかりとできる妻であることが、少しは嬉しい。

「そやから、私は何も言わへんし、あんたが話したりや。保証金の精算なんかの事務的なことは、仙台から来る奥さんに私が話すさかい。そんでええやろ？」

「それからなあ・・・」と言いながら、美佐子は財布を開けて、5千円札を1枚源次郎に差し出す。

「これ、なんや？」

「あんな、もうすぐお昼や。ここで食べさせてあげてもええけど、喉通らんやろ。あんた、どっか適当なとこ連れてったりや。これは、そんな時の経費や。頼んだで。」

どこまでも、気配りのできる女である。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その34)

それから、予定の20分を過ぎて、やがて30分が経過しようとしたとき、表にバイクの音がした。

「誰や？ 玄関先にバイクなんか止めて貰うたらあかんで。」と思いつつ、源次郎が外を覗く。

黒いやや大型のオートバイが、入り口を少し過ぎたところで止められる。

大きなエンジン音が、ふうっと消されるように、止められる。

その光景を見たとき、源次郎は息を呑んだ。

「えっ！・・・あんときの・・・」

源次郎の声は言葉にならない、言葉にできない。

今まさに、マンションの入り口に乗り付けたのは、あの夏祭りの夜に出会ったあの黒ずくめのライダーなのだ。まだ、フルフェイスのヘルメットを脱いでるわけでもなく、声を聞いたわけでもない。しかし、あのときのライダーだという確信は、源次郎に明確にあった。

オートバイのことは良くは分からない。分からないのだが、あのときに見た、お尻のほうがぴゅんと跳ね上がったような形には確かな覚えがあった。

源次郎は、美佐子に見つからないように表に出て行く。

別段に、悪いことをしているつもりはないのだが、あの夜の女であることに、何かしら「不安」のようなものを感じるのだ。何故なの

かは自分でも分かっていない。

「もしかして……あんた……あん時の……」と可笑しな声の掛け方である。

その源次郎に気が付いたライダーが、軽く一礼して、ゆっくりとフルフェイスを脱ぐ。

そして、ヘルメットで押さえつけられていた髪を、頭を振ることによって解き放つ。

片手で、その髪を軽く掻き上げる。

あの夜見た、あの仕草とまったく同じ動作が、今、目の前で繰り返されている。

源次郎は、あの夜と同じように、ただポカンとした状態で、それを眺めている。

えーと、確か、名前が……小暮とか言ってたよな、この女。そうだった、どこかの病院の看護師だとかも言ってたよな。

源次郎が、遠い記憶を思い起こしている。

とすると、向井が死んだことを知っていてやって来たのだろうか？それとも、まだ知らないのか。

おいおい、そう言えば、今回、向井が搬送された山王付属の病院で働いていたことがあるとも言ってたな。

そこからの情報でも入ったのだろうか？

それにしても、どうしてこの女がここにやって来るのだ？？？

あの夜の雰囲気からして、単なるお知り合いではない筈だと思う。

向井も、細かく詮索されることを避けていた。

それなりの関係だと勝手にだが思っている。

そうした関係の女が、またひとり現れたのだ。

源次郎の頭の中が、次第に訳の分からない焦りに繋がっている。

「この度は、お世話をお掛けいたしました。」

女が源次郎の予測していた範囲外のことを言う。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その35)

「えっ！・・・」

源次郎は、さらに頭が混乱する。

今の声は、確かに早朝に顔色を変えてやってきた、あの妹の声である。

「どうして？・・・何が、どうなってる？・・・」

目の前にいるのは、紛れもなくあの夏の夜のライダーなのだ。それなのに、話しているのは朝来た「妹」なのだ。

改めて、気を落ち着けて、まじまじと女の顔を見る。

源次郎に見つめられた女は、困惑するような顔を見せる。

「えっ！・・・妹さん？妹さんだよね。・・・だとすると、あの

夏祭りの夜に会ったのも、あなた？」

女が、黙って「こくり」と頷く。

「そうか、そうだったんだ。あれから、何度か向井さんと一緒のところをお見かけしたのに、まったく姿形が違ってたから、ホント気付きませんでした。・・・そうなんですか。あの時も、あなただったんですね。・・・そりゃ、たまげた。」

言い訳ではない。あの夏の夜は、向井に紹介されて互いに一言挨拶しただけである。しかも夜道で暗かった。相手の顔がよく見える状況ではなかった。

ましてや、あまり詮索すべき間柄ではないと悟っていたから、敢えて印象にとどめなかったのかもしれない。男同士の心配りというか、そんなことを思った記憶がある。

そうこうしていると、後ろから、美佐子が出てくる。

「あんた、そんなところでいつまでウダウダ言ってるの。さっさと入ってもらいなさいよ。」と源次郎の狼狽振りにはお構いなしである。

美佐子の言葉に押されるように、二人は管理人室の事務机の所に座る。

「本当に、いろいろと有難うございました。」と女が頭を下げる。

「いろいろと大変でしたね。……」と源次郎が受ける。だが、その後の言葉が続かない。

どこから話すべきなのか、まったく整理ができていない。

あの夏の夜の女性ライダーは確か「小暮」とかなんとかだと、向井が紹介した。

それと同じ女性が、今度は「向井の妹」だと名乗って、やってきた。

勿論、その「妹」というのは偽りであろうと思う。

そうすれば、向井とこの女性はどのような関係なのだ？

それが明確にならなければ、これからの話が前に進まなくなる。

美佐子が珈琲を入れて持ってきてくれた。小さい目のカップである。

「あんた、一服してもらったら、……ね。分かった。」と言いながら、何やら目配せをする。

そうか、ここでは、例えば管理人室だとは言っても、住人が通るたびに顔が見える場所である。

美佐子が「適当なところで食事を……」と言った意味が、いまさ

らによく理解できる。

場所を改めてから、ゆっくりと話を聞こう。そうするべきだろう。と源次郎は思った。

「ここではなんですし、ちょっと、食事にでも付き合ってくださいな。人目がないところの方が、話されやすいでしょう？こちらも、いろいろとお尋ねしておかなきゃいけないこともあるんで。」
カップの珈琲を殆ど一気に飲んで、源次郎が女を誘う。

「はい。わかりました。ご配慮有難うございます。」と女が答えて、席を立つ。

「ヘルメットは預かってくわ。」と美佐子が横から両手を出して、それを受け取る。

「ゆっくりとしてきなさいよ。まだ、時間はあるわよ。大丈夫だから……。」と女の肩に手をやって送り出す。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その36)

源次郎は、寿司屋の「魚雅」へ行くつもりだ。

丁度、マンションの真裏に位置する場所だが、お爺さんの代からやっている店で、今の店主は学校時代の後輩に当たる。気心が知れていて、多少の無理も聞いてくれるのが嬉しいところだ。

魚雅の暖簾を潜る。

今はまだ正午にはなっていないが、さすがに土曜日である。さほど大きくはない店内は、ほぼ満席の様子である。大部分が家族連れである。

「まいど! らっしやい!」店主自らが大きな声で迎えてくれる。

彼の「いらっしやい!」は、最初の「い」が無声音のようになって、「らっしやい!」に聞こえる。

先輩後輩の間柄だから、ちゃんと「いらっしやい!」と言えと叱ったことがあるが、何年経っても変わらない。相変わらずの「らっしやい!」である。

「功ちゃん、奥の部屋空いてる?」と源次郎が訊く。

すると、「かあちゃん、奥明けたって!」と大きな声で奥さんに言う。手は、忙しそうに止まらないで、次々と寿司を握っている。

店内への給仕を仕切っている奥さんが、「あいよ!」と声を掛けて、そのまま奥へ走り込む。

「ちよい、待ったって。直ぐに開けるさかいな。なんせ、最近は孫の保育園みたいになっとるさかい。綺麗にはしとらんで。我慢してや。」

店主は、依然として手を休めることなく、それでいて、店の中の状

況も、その視野に入れながら、源次郎にもそれなりの会話をする。次々と盛り付けられた寿司桶が、若い店員の手に渡って運ばれていく。

そして、また次の注文が叫ばれる。まさに、食事時の飲食店は戦場のような緊迫感である。

奥から「空きましたんで、どうぞ・・・」という声が掛かって、源次郎は女を伴って奥へと進む。

慣れた道筋を進む。中庭のようなところを通っていくと、その奥に小さな「離れ」のような部屋がある。

引き戸をあけて、庭から直接部屋に上がる。

八畳ぐらいの和室だが、その上から深いグリーンのカーペットが敷いてある。店主が言っていたように、孫達、つまり小さな子供達が使っているようだから、彼らに汚されなかったための工夫だと思われた。

部屋の中央にふたつ並べられたテーブルがあって、部屋の隅に座布団が10枚ぐらい積み上げられている。

源次郎は、その座布団を2枚だけとって、手前側のテーブルのところに、対面になるように一枚ずつおく。

そして、「どうぞ」と女に声を掛ける。

バイクブーツを脱ぐのに多少手間取っていた女も、やや遅れて席に座る。

「足崩してくださいよ。」と源次郎が言う。

「はい、有難うございます。」と言った女の顔には、明らかな涙の後が見て取れる。

「失礼します」と庭から声が掛かって、若い男の子がお茶を運んできてくれる。

丁寧にあつた湯飲みをテーブルの上においてから、彼は「ご注文は？」と訊ねてくる。

「そうだな、立込んでいるようだし、功ちゃん、いや大将に任せると言つていてや。それと、急がへんから、とも伝えて。」と源次郎が答える。

「では、ごゆっくり」と言い残して、若い店員はゆっくりと引き戸を閉めて行く。

その気配が遠ざかってから、おもむろに女が座布団から降りて、口を開く。

「嘘までついて、ごめんなさい。申し訳ありませんでした。」

両手を床に着いて、深々と頭を下げる。

源次郎は、ただ黙ってその姿を見ている。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その37)

「失礼を承知でお聞きするんですが……」と源次郎は小声で話しかける。

女は、まだ頭を上げない。床に着いた手の上に、自らの額を乗せたまま、身動きしない。

ただ、真っ黒なバイクスーツに身を包んだその背中が、細かく震えているように思える。

「確か、小暮さんとかおっしゃいましたよね。夏の夜にお会いしたとき、向井さんがそのようにご紹介されたと思います。……向井さんとのご関係をお聞かせいただけませんか？」

女は、依然として伏せたままである。

「私も、人にはいろいろな事情があるのだということは理解しています。ですから、あなたが妹さんだと今日初めて名乗られたときも、そのこと自体がおかしいなどとは思いませんでした。ただね、こんなことになってしまった以上、やはり納得のいくようにご説明いただかないと、これから先、どのように対応するべきなのかが判断できないんですよ。」

源次郎はそれだけを言って、後は暫く待つことにする。

立て続けに問い質しても、すんなり答えられるものではないことだけは、想像がつく。

暫くの間の沈黙があって、ようやく女が上体を起こしてくる。

泣いていたのだ。顔が可哀想なぐらいに崩れてしまっている。

それに気付いた源次郎が、湯飲みを持ったまま、庭のほうに視線を外す。

「どこから、お話すべきなのかも分かりませんが、忠明さんには、いえ、向井さんには公私共にお世話になっておりました。」
源次郎は、黙って聴いている。ここで、口を挟むと、女は話せなくなるだろうと思っている。

女が、ひとつひとつ、言葉を選んでいるように、また、過去の日めくりを一枚一枚手繰るように、ポツリポツリと話し始める。

出会いは、私が以前勤めておりました山王大学の付属病院に向井さんが検査入院された時です。

実は、私、そのとき、妊娠しておりまして……。

迷っていたんです。……生むべきか堕ろすべきか。

相手はその病院にいた医師でしたが、結婚できる相手ではなかったもので……。

そんな時、向井さんと知りあったのです。

入院されたとき、梶井基次郎の短編集をお持ちでした。それがきっかけでした。

私も好きなんです、と言いましたら、今日明日で読み終えるからと、その短編集をお借りしたことが始まりです。

向井さんはその後検査結果も特には問題がなく、5日ほどで退院されましたが、私は、お腹の子供のことでその医師と険悪な状況になってしまい、ついには病院を辞めることにしたんです。

ひとりになって、仕事からも離れてみて、じっくり考えてみたかったです。

でも、やはり結論が出せません。

日に日に、迷いが大きくなって、毎日、時計の振り子のように思いが揺れ動くのです。

そんなある日、なぜか、向井さんに無性に会いたくなったんです。

短編集をお返しするときのためにと、お聞きしていた携帯電話の番号に電話をしていました。

あの屈託のない笑顔に会いたかったんです。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その38)

電話を掛けると、向井さんは気軽に会おうよとおっしゃって。今日でもいいよって。

それで、私は、飛んで行きました。

軽くお食事をして、おしゃれなバーに連れて行ってもらいました。そうしている間に、私は悩んでいることをすべて話していたように思います。

甘えていたんだと思います。甘えたかったんだと思います。

看護師の資格を取ったとき、これでひとりでも生きていけると意気込んだことも忘れてしまつて。愚かなものだと思います、自分でも、そのときは、そうする他に、道がないような気がしていました。情けないです。

それで、向井さんが

「よく話したね。その相手に選ばれたことを誇りに思うよ」って言うてくださった。

嬉しかったです。本当に。

「でもね、その答えは自分で出すべきものだよ。僕がどうこう言うべきことじゃない。でも、こうして、話しているうちに、自分の中で考えが整理できた筈だよ。結論は、悩んでもいいから君自身で出すんだ。僕が力になって上げられるのは、どうするかを君が決めてからだ。」とおっしゃって。

さらに、「どちらの結論を選択したとしても、僕は君の決定を応援する。」とまで言われて。

本当に嬉しかったんです。親にも相談できない状況でしたから。

それで、言われたとおり、自分で一生懸命に考えて、結論を出しました。

それを連絡したら、「そうか。決めたか。その結論を大切にするんだよ。」って。

それから、私は遠くの婦人科病院に行きました。

そして、向井さんの紹介で、今の病院へ勤めることになったんです。

以前にいた大学付属よりは規模は小さいですけど、院長先生はじめ、皆さんよくしてくださって。

ありがたいと思っています。

もし、あの時、向井さんと出会っていなかったら、今の私は、ここにいなかったかもしれません。

こうして、ちゃんと生きてこられたのも、向井さんのお陰だと思っているんです。

管理人さんは、お疑いかもしれません。向井さんと私のこと。

でも、これだけなんです。本当なんです。信じてください。決して、男と女の関係ではありません。

向井さんの名誉のためにも、これだけは私がはっきりとお伝えしておかなければ・・・と思っています。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その39)

女は、そこまでで、また涙を流し始める。

源次郎は「うん、そうなのかも知れん」とも思っている。

この小暮という女と向井忠明。確かに、普通の知り合いではない、という感覚はある。

夏祭りの夜もそうであつたし、今朝の、あの顔色で飛び込んできたのもそうである。

単なる知人のレベルは超えている筈だ。

だが、それでも、「男と女」であるかと問われれば、源次郎は「？」をつけるのだ。

そのようなことを考えながら、それでも源次郎は、庭においた視線を戻さない。

それを、源次郎の「そこから先を……」という言葉だと捉えて、女がまた話し始める。

それから以後のことは、本当に私の我俣から出たことなんです。

「就職先をお世話頂いたお礼の意味で……」とお食事に誘いました。

安物の居酒屋でしたが、向井さんは喜んでお付き合いくださいました。

楽しかったです。元気付けられました。勇気をいただきました。

それで、「これからも、こうしたお時間をくださいませんか？」とお願いしました。

そしたら、「こんな詰まらない僕でよければ、いつでも……」と

おっしゃって。

こんなに優しくて、それでいて切なくなる接し方をされた人は初めてでした。

ある冬の日、寒い日でしたが、私の初めてのボーナスが出たので、向井さんをお食事に誘ったんです。この日も、気軽に「いいよ!」っておっしゃって。

そして、少しアルコールが入った頃、向井さんの顔色が急に悪くなったんです。

私も看護師の端くれでしたし、向井さんの持病も分かっていましたから、直ぐにここまでお送りしてきたのです。

ここのお部屋にお邪魔したのは、そのときが初めてです。

そのまま、お休みになれるようにと、着替えなどをお手伝いして、常備されていたお薬もちゃんと飲んでいただいてから、私は帰るつもりでした。

「ゆっくりお休みくださいね。こんな日にお誘いして、済みませんでした。」と言いました。

そして、帰ろうと、出口のところまで行った時に気が付いたんです。

部屋の鍵を掛けて出ようにも、私はその鍵を持っていません。

お部屋に戻って、向井さんに鍵のことを確認しようとしたのですが、もう既にうつらうつら眠られているようでした。

起こして聞こうか、それとも勝手に鍵を探して、外から掛けておいて郵便受けから中へ投げ込むようにしようか、いろいろと迷いました。

でも、時折苦しそうな顔をされる向井さんを見ると、とてもそのままおいて帰ることが出来なかったんです。

結局、私は、向井さんの傍で、朝までじっとしていたんです。

(つづく)

第1話 兄と妹（その40）

明け方近くに、向井さん、一度目を覚まされました。

そして、私がそこにいることにとても驚かれました。

「どうして帰らなかった？」と訊かれましたが、私は何も言えませんでした。

そうしたら、ただ「ありがとう。迷惑掛けたね。折角、誘ってくれたのに。」とだけおっしゃって。

その後、また、浅い眠りに就かれたようでした。

程なくして、枕元にあった目覚まし時計が鳴ったんです。

時刻は5時丁度を指していました。

慌てて停めようとしたが、それよりも早く向井さんの手が、時計に届いていました。

そして、身を起こされたのです。

「こんなに早く起きられるのですか？もう少しお休みになられたほうが……。私が起こしますから。」と申し上げたのですが、「起きる」とおっしゃって。

私が居ては駄目だと思って、キッチンの方へ行きました。そして、取り敢えずは……とお湯を沸かす準備をしました。

向井さんは、シャワーを浴びておられるようでした。高血圧だと分かっていたいましたし、昨夜のことがありましたから、私は心配で心配で、バスルームから聞こえる音にずっと気をつけていました。

お湯が沸いたので、珈琲か何かをと辺りを見渡したのですが、きちっと整理整頓されているようで、見る限りにはそうしたものは見当たりません。

様子を見るということも兼ねて、声を掛けてみることにしました。

バスルームの前に立って、「あのう・・・お湯を沸かしたのですが、お茶がいいですか？それとも珈琲ですか？」と声を掛けました。中でシャワーのお湯が弾け飛ぶ音がします。

「有難う。じゃあ、珈琲を。インスタントだけれど、冷蔵庫の横の収納棚の一番上に入っているから、それを使って。」と大きな声。私は、ほっとしました。

そしたら、なぜか、泣けていました。

言われた場所からインスタント珈琲と角砂糖を出して、洗い桶の中に見つけたカップで珈琲を入れました。ミルクはいつも入れられていないことを知っていました。

そこに、上気した顔で、大きなガウンを纏われた向井さんが来られました。

私が準備した珈琲をご覧になって、「君のは？」とおっしゃって。

私は「要りませんから」という意味で首を振ったのですが、お構いなしに食器棚から新たなカップを出されて、「今度は、君の分を僕が入れるからね」と手際よく珈琲を入れてくださいました。

私は、本当に不思議な感じだったのです。誰か、他人の為に珈琲を入れる、誰かに、私の為に珈琲を入れてもらう、そんなごく普通のこと、私には随分長い間なかったような気がしました。

これが、生活しているっていう感覚なんだって、思いました。

以前に付き合っていた男とは、ベッドの上での睦み合いはあっても、こうしたこともなく、コンビニやホテルの冷蔵庫にある缶コーヒーや缶ジュースしか手にした記憶がなかったのです。

(555)

第1話 兄と妹 (その41)

向井さんに言われるがままに、キッチンの傍にある小さな食卓で、入れて頂いた珈琲を飲みました。
凄く美味しく感じました。

それは、インスタントであるとかないとかではなく、私の為に向井さんがわざわざ入れてくれたものだからだと思います。それまでに飲んだ、どこの珈琲よりも美味しく、冷えた体の中に染透るような感覚でした。

そのカップから立ち上る湯気で、私の目は涙で一杯でした。

でも、そのとき感じたんです。本当に小さな食卓だなあって。

「いつも、ここで食事されているのですか？」と、つい訊いてしまいました。

そしたら、「そうだね。君のような素敵な人からのお誘いがなければ、ここで食べているよ。まあ、朝は珈琲だけの場合が多いけれど。」と向井さんはおっしゃっていました。

そうなんだ、夜、ここで、ひとりで・・・と思うと、自分の姿とダブってしまうんですね。

私から見れば、大企業の部長さんっていう、とても手が届くような方ではないと思っていたのに・・・と本当に意外な感じがしました。

「昨晩は迷惑を掛けたよね。だらしない所を見られて恥ずかしいよ。でも、本当にありがとう。」と向井さんは私なんかには頭を下げてくささいました。

こちらが恐縮しました。体調がすぐれないのに、私のわがままにお

付合いくださったから、昨夜のようなことになったのに。と私は思っていました。

「今日も仕事なんだろう？寝てなくて大丈夫？」と訊かれました。幸い、その日は夜勤でしたから、夜の８時までに行けば良かったので、「大丈夫です。夜勤からですから、これから帰ってたっぷり寝ますから」と言いました。

それから、向井さんは「仕事の前に行かなきゃならないところがあるの」と、タクシーで私の家まで送り届けていただきました。

それからなんです。

私がわがままを言い出したのは。

こんなことを言うのはおかしいのですが、「同じ境遇」のような気がしたので。

例え一週間に一度でもいいから、あの小さな食卓を私の作った料理で一杯にしたい。そして、向井さんと向き合って、ご飯を食べたい。

向井さんに「美味しいね」って言ってもらいたい。

私だって、誰かと笑いながら食事ぐらいしたい。

そう、思うようになったんです。

本当に、それだけなんです。

それで、あるとき、電話でそれを向井さんに提案しました。

向井さんは「あははは・・・ママゴトがしてみたくなったのかな？」とお笑いになりましたが、少し考えられてから、「いいよ。君の好きなようにしなさい。」っておっしゃったんです。

私は嬉しくなって、日勤の時は、買い物をしてから、向井さんのお部屋に行くようになったんです。

もちろん、その都度、事前に向井さんのご了解は貰っていました。

お部屋に行くと、いつも鍵は開けられていました。そっと、中に入ると、向井さんはいつも本をお読みになっていました。

私は、そのお邪魔をしないように、出来るだけ静かにお料理を作りました。

そして、お皿に盛り付けて・・・一緒に食べました。

そんなに高級な料理などは作れません。美味しくもないと思います。

でも、「美味しいよ。これは何ていう料理かな？」とか、「この魚は、油で揚げるより、ムニエルにした方が美味しいと思うよ」とか、とにかく、いろいろな他愛のない話をしてもらいながら食べました。

こんなに喜んでもらえるなんて、と感激でした。

こんなに料理が楽しいものだとは知りませんでした。

そのうちに、向井さんが「これ買ってきたから使いなさい」と、可愛いプリント模様がついたエプロンと、御揃いの柄の夫婦茶碗をくださいました。

「一人暮らししか念頭になかったもので、食器らしい食器も揃っていなかったから、不便を掛けただけ、適当に買ってきたから、使えそうなものがあれば使ってよ。」と大きな紙袋を指差されました。中には、いろいろな大きさのお皿などが2枚ずつ入っていました。

それを見たとき、私は、嬉しくって泣いちゃいました。

認めてもらえた。ここへ来ることを、認めてもらえたんだ、と思いました。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その42)

源次郎は、女の話聞きながら、庭の片隅にある大きな庭石を見つめていた。

手に持った湯飲みは、両手の中でほぼ体温と同じ温度までぬるいものに変わっている。

夏祭りの夜に見た向井忠明という男の一面と、今、女が話している向井忠明とが不思議なほどしつかりと重なってきている。違和感がない。

美佐子が言っていた夫婦茶碗の件も、これで納得が行く。

「そうなんですよ。そういうことなんですよ。」と、

女の口を借りる形で、向井が話しかけてきているような気になる。

「分かりました。随分と辛い話をさせてしまったようで・・・。」と源次郎が口を開く。

女は、依然として、下を向いたままで「いやいや」をするかのように、首を横に振る。

まだ、話したい、話し足りない、というのだろうか。

源次郎は、手にしていた湯飲みをテーブルに戻して、女の真正面に向いて座りなおす。

そして、「もうひとつだけ、お聞かせ願えますか？」と切り出す。

「どうして、妹だと・・・。」

女は、今度は首を縦に振る。

源次郎が何故それに拘るのかを理解したのかもしれない。

「それは、とっさのことです。」と女が話し始める。

昨晚も、7時過ぎにお部屋を訪ねました。あっさりしたものが食べたいとおっしゃっていましたが、お造りを買って行っただんですが、あまり食欲がないとのことで、少ししか食べられませんでした。お疲れの様子だったので「早い目にお休みください」とだけ言って、私は失礼をさせてもらいました。11時過ぎだったと思います。

夜道だし、交通事故が心配だからと、私が自宅に戻ったら「今、戻りました。おやすみなさい。」というだけの電話をするように言われていました。夜、帰ることになりますから、お邪魔するときは、いつもバイクで来ていましたから。それで、事故を心配されたのだと思います。

昨夜も同じように電話を掛けたんです。「無事に帰りました」って。

ところが、応答がなかったのです。

トイレかも・・・と少し間を空けてまた電話を掛けました。

それでも、電話に出られません。

私は、不吉な予感がしたのです。

そのあと、しつこいぐらいに電話を掛けましたが、結果は同じです。

私は、再度、バイクでここまで来ようかと思いました。

でも、部屋の鍵を持っていませんから、来ても入れない。どうしよう・・・と悩みました。

結局は、朝まで待ってしまっ

た。あの時、直ぐに駆けつけて、管理人さんにご無理を言っておれば、助かったかも知れないと思うと・・・。

女は、そこで完全に泣き出してしまふ。大粒の涙が両頬を滝のよう
に伝う。

「つまりは、妹だとしても言わない限り、あの部屋の鍵を開けてもら
えないとお考えになった……。」「
と、源次郎が自分なりの推論を言う。

女は、ハンカチで両目を押さえたまま、大きく頷く。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その43)

「私が、向井さんを見殺しにしたようなものです……。昨夜、私が自分の立場というものに躊躇したために、大切な向井さんを助けられなかった。あれだけ、いろいろと助けてもらったり支えになってももらったりしたのに、私は、自分の優柔不断さから、その恩を仇で返したようなことになってしまつて。悔やんでも悔やみきれないんです。」

女は、咽びながら、自分を責める。

源次郎は、今朝、この女が507号室を開けろと言つてきたときの様子を思い出していた。

確かに、切羽詰つたものがあつた。悲壮感のようなものもあつた。それは、こうしたいきさつから来たものであつたことを聞いて、ようやく納得できる。

だが、だからといって、この場で掛けられる言葉も出ない。

庭から、下駄の足音が聞こえてくる。

女は、慌てて、引き戸に背を向ける。今の顔を見られたくないのだろう。

当然といえば、当然である。

源次郎は、やってくる足音で、それが店主である功だと直ぐに分かる。

店主は、引き戸を開ける前に、軽く咳払いをする。気を利かせたつもりなのだ。

源次郎が、内側から、引き戸を開ける。

「ここで、貰うよ。」と、重箱のように積み上げた器を受け取る。店主は、チラッと部屋の中の様子を伺ったが、直ぐに「じゃあ、ごゆっくり」と言って、また下駄の音を響かせて店へと戻っていった。

「寿司がきました。ともかくも、食べませんか。」と言いながら、源次郎はテーブルの上にその積み重ねられた容器を置く。

開けると、一段目には“にぎり”が、そして二段目には鰻のお吸い物と、イカそうめんが綺麗な器に入れられてあった。

奴め、女性が好むものを考えたな、と少し嬉しくなる。気が利いた品であり、取り合わせだと思う。

「朝から、何も口に入っていないのでしょうか？少しだけでもいいですから、食べてください。これから、まだやらなきゃならないことが沢山あるでしょうから。」と源次郎が女に勧める。

女は、ただ首を横に振るだけである。

源次郎は、二段となっている容器を女の前において、そして自分の前にも置く。

「温かいうちに食べてください。それでも、ここの店主が心を込めて作ってくれたものですから。」といって、まずは自分から食べ始める。

そうでもない、女がこのまま手をつけないだろうと思ったのだ。

「ご事情は何か理解しました。おっしゃったことは、そのまま信じます。向井さんらしいな、と今更に思いますよ。……きつ

と、向井さんもご家族が欲しかったんだと思います。だから、あなたは、その夢を、希望がある意味で叶えてあげたことになるんだ。そう、思います。……だから、それ以上、ご自分を責めることは……もう、いいんじゃないかと……。ねっ！」

源次郎は、最後の「ねっ！」にわざわざ力を込める。

女は、それでも首を横に振っている。自分を許せないのだろう。

「……でも、昨夜だったら、間に合っていたかも……。」

それを聞いて、源次郎が、少し大きめの声で言う。半ば、威圧的である。

「昨夜、しかも深夜でしょう？ そんな時間に来られても、私は絶対にお部屋を開けてはいませんよ。ドアをノックしたりもしませんよ。それが、常識でしょう？ 返事がなくて当たり前ですよ。誰しもが寝ている時間ですからね。ですから、昨夜、あなたが来られたとしても、結果は同じだったんです。私がお部屋へ行くことを拒否してますから。」

(つづく)

第1話 兄と妹 (その44)

女が顔を上げる。

源次郎を見る目が大きくなっている。

「本当ですか？・・・私が、深夜に引き返して来ても、お部屋を開けてはもらえなかったんですか？」

真剣な眼差しで訊いてくる。

「はい。それが常識ですよ。今だから言いますが、真夜中にその格好でお出でになって、妹だから部屋の鍵を貸せと言われても、誰が貸します？・・・そうでしょう？・・・身分証明をしてもらいますし、どうしてもと言われるのであれば警察を呼んでいますよ。」

「そうなんですか・・・」

「身分証明をと言ったら、お困りになった筈。警察でも、あなたのおっしゃる理由だけで、個人宅を開けることは出来ませんしね。だから、結果は同じだったんですよ。あなたの責任じゃない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

源次郎は、あえて、ここは冷たい判断を示す。だが、それは事実でもある。

マンションの管理をやっていると、それこそ、住人個人個人に関わるいろいろな問題に出くわす。見たくないところも見ってしまうし、聞きたくなかったことまでが耳に入る。

そうしたとき、より納得性のある対応は何か、と言われれば、それは「常識」なのである。

いろいろな人が住んでいるから、いろいろな価値判断がある。それは致し方ないことだが、一旦、何らかの問題が起きたときは、それ

をコントロールする機能が必要なのである。

源次郎は、常に「常識」を基準して、人を納得させることに心を砕いている。

暫くすると、ようやく女の表情にも落ち着きが窺えるようになる。目を真っ赤に腫らしてはいるが、最初のような取り乱した雰囲気は薄れてきている。

「……でも、だったら、私……。どうすべきだったんでしょう？ どうしたらよかったのでしょうか？」

「あなたは、できる限りのことをされた、私はそう思いますよ。」

「……でも、……」

「向井さんは救われたと思いますよ、あなたに。」

「……。どういふことですか？ 私の方が助けてもらったのに。」
「あなたに出会えたこと、向井さんは、本当に喜んでおられたんだと思います。昨夜だって、あなたが来られたことが具合が悪くなった原因ではないでしょう。もし、昨夜あなたがここへ来られてなくて、向井さんの体調が同じように悪くなっていたとすれば、今現在も、誰もそれに気付いていない筈でしょう？ あなたが、今朝、向井さんの異変に気付かれて駆け込んで来られなかったら、向井さんは病院へ運ばれることもなく、誰にも看取られることもなく、たったひとりで逝かれた筈なんですよ。そうでしょう？」

女は、源次郎の言葉を聞いて、両耳を塞いでしまう。

今朝の、わずか数時間前の光景が、まざまざと蘇るのだろう。

「だからね、あなたは向井さんに最高の恩返しをされているんですよ。妹だとか、そうでないとかの問題ではなくて、向井さんにとって、今、もっとも身近にいてくれた家族に見守られて旅立たれた。そう思っているのじゃないのか。私は、そう思います。」

女は、源次郎の顔を睨むように見つめる。

目からは涙が溢れ、口から洩れてくる嗚咽を手で押さえ込むようにして、睨みつける。

「本当ですか？・・・本当に、そう思われますか？・・・」

「はい。断言しても良いですよ。向井さんは、ご自分の最後の時間をあなたと共有できたことを、何よりも喜ばれていると思います。あなたの介護を受け、あなたに付き添われて病院へ運ばれ、そして、あなたに手を取られて息を引き取られた。例え、本当の家族でなくとも、今、もっとも心を許せる人に見送られて旅立たれた。これほどの最後って、望んでもそうあるものではありません。」

女が崩れるように、両手を床につく。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その45)

「有難うございます。。。。」

女は、そう言つて、深々と頭を下げる。

「そのように思つてくださる方がおられるなんて。。。」

「この寿司、旨いですよ。ひとつでも、ふたつでも、いいですから、食べなさい。そうでないと、これからの話をする事が出来ませんよ。」

女の様子を見ながら、源次郎はするように食べることを勧める。

女は、少し考えるような仕草の後、改めて軽く頭を下げてから、ようやく外していた座布団の上にゆっくりと身体を戻す。そして、これまたゆっくりと箸を手にした。

源次郎は、少しだけほっとする。

女が吸い物を口に運ぶ。

旨いだろなと源次郎は思う。

もちろん、ここの店主の腕がいいということもあるが、それ以上に、自分を責め続けてきたこの女にとって、少しだけではあるが、口にあるものが運べる精神状態になったことが、そう連想させる。

「それでね、これからのことなんですが・・・・」と源次郎が語りかける。

ようやくのことで、女がにぎりをひとつ口に入れたのを確認してからのことである。

「お電話で少しだけお話してありますが、今日の夕刻には仙台から奥様とお嬢様が到着されます。病院のほうへ直行されとの事ですが、その後、多分夜になると思いますが、お部屋にも来られるとの事です。」

女は、黙ってそれを聞いている。

その反応を見定めながら、源次郎は言葉を続ける。

「それでね。こうした時にこんな言い方をするときついかもしれませんが、先ほどお話になったように、今のお部屋にはあなたの痕跡がありますよね。奥様やお嬢様であれば、それがどのような意味を持つかを想像されると思うんです。あなたがおっしゃるとおり、それは誤解なんですよ。誤解なんですが、普通に、ごく一般的に考えると、お二人にとってはとても酷な現実に映ると思うんです。それは、ご理解いただけますよね。」

女は、テーブルの上の一点を見つめるようにして、動かない。頭の中で、仙台からやってくる二人を想像しているのか、あるいは向井の部屋に残されている自分の痕跡を確認しているのか、源次郎には分からない。

女は、ただ、こくりと頷くだけである。

「ですからね、お二人が来られるまでに、お部屋をそれなりにしておきたい、と思っっているんです。悲しみにの上に、さらに追い討ちを掛けるようなことだけはしたくないし、向井さんご自身も、きっとそのように思われていると思うんです。」

女は、黙って、じっと源次郎の言うことを聞いている。

「あなたにとって、非常に辛いことを言っているということは分かっています。向井さんとの思い出が詰まっている部屋から、あなたを消せと言っているのも同じですからね。ですが、これが現実なんです。ご家族が来られる以上、向井さんをそのご家族にお返ししな

くてはいけないんです。分かってもらえますよね。」

「はい、それはよく分かっているつもりです。」

女は、今度ははっきりとした口調で、そのように答える。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その46)

「そうですか。それだけでもご理解いただいているのなら、もう、私からは何も言うことはありません。」

源次郎は、やさしく、それでいて宥めるように話す。

それから、1時間弱の間、源次郎と女はその部屋にいた。

時には黙り込んで、また、時には自分の胸にある思いを吐き出すようにして、女の話は繰り返された。

私、歪んだまま、大人になったのかも知れません。

私の両親は、私と妹が小学生の時に離婚しています。父の暴力が原因だったそうです。

その後、母は私たち姉妹を連れて再婚したんですが、また、3年ほどで離婚しました。

そして、私が高校生になったとき、3度目の結婚。嫌でした。反対もしました。それでも駄目でした。

家庭の中は荒れていました。

私も、俗に言う「非行少女」になって、家に寄り付かなかった時期もありました。

家にいたくなかった。どこか遠くへ行きたかった。

「売春」にも手を染めました。お金が欲しかったのか、それとも男からお金を取ることに快感があったのか、今となっては自分でも分かりません。

経済的なこともありましたが、男にすがって生きようとする母に嫌悪を感じていました。

同じ女として、母親を呪ったこともありました。

それが、私の出発点だったかもしれません。

ですから、男性に対する偏見もありましたし、軽蔑もしていました。

でも、そう思いながらも、男に身を任せてしまう自分がいました。

そんなときに、向井さんと出会ったのです。

本当に不思議な感じのする人でした。男を感じさせないと言えば変な言い方かもしれませんが、少なくとも私には「男」が感じられませんでした。

一緒に居て、歪んだ自分が窮屈だとは思わなかったんです。

男兄弟がいたら、こんな感じなのかなあ、なんて思ったのです。

それが、とっさの言葉として「妹」と名乗ったひとつの要因かもしれません。

でも、それは私の身勝手だったんですよね。向井さんには、ちゃんとした奥様がおられて、娘さんがおられて。家族がおられたんですよね。私が、勝手に、お兄さんと感じていたのが厚かましいだけだったんですね。

だけど、それでも、そう思っていたられた時間って、私にはかけがえのないものだったんです。

それを失った今、改めてそのように思います。

源次郎は、話したいだけ話せばいい、と思っていた。それで、心の整理ができるのであれば、黙って聞いてやるのも管理人の役目だろうと。

今は、病院の中で、何も言わずに家族を待っている向井に成り代わって、既に向井が聞いていたであろう女の生い立ちまでを、ただ静

かに聞いてやる。

人間は、思いの丈を吐き出してしまふと、楽になる
女が落ち着いたのを見計らって、源次郎は、マンションへと女を連れ
れて戻った。

午後の1時半を過ぎていた。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その47)

管理人室に戻ると、美佐子が待ちかねていたように駆け寄ってくる。

そして、女から源次郎を引き離すように手招きしてから、早口でこう言う。

「あんた、ご苦労さんやったね。・・・ところでさ、向井さんの会社の人から電話があって・・・」

「ほう、やっぱりな。」と源次郎が応じる。

「なんや、掛かってくるの、分かってたってこと？」美佐子是不満そうである。

「いや、そういうことではないんやが・・・」と源次郎はその後、の言葉を飲み込む。

源次郎には確かな予感があった。

向井の実家に「亡くなった」と一報を入れた時点から、いずれは「会社」が前面へ出てくる筈だと思っていた。

仕事の都合で単身赴任している社員が亡くなった場合、連絡を受けた家族が真っ先にすることは、所属する会社への報告である。

ましてや、向井の妻は社長の一人娘だと聞かされている。それが事実ならば、大阪からの訃報は直ちに大阪にある本社と社長の自宅に折り返して連絡されている筈なのだ。

今日は土曜日で、休業日なのだろうが、向井が勤めていた会社ほどの規模であれば、そうした場合でも迅速な対応が出来るように、連絡網や情報連絡体制というものが整備されている。

その電話も、恐らくはそうした社員家族への対応を担当する部署の人間からのものだろう。とにかく、まずは事実確認からである。ひょっとすると、社長からの命令もあったかもしれない。

「それでさ、亡くなった時の状況を教えろとかさ、病名はなんだとかさ……いろいろと聞いてきて……。」

美佐子は眉間に皺を寄せて喋ってくる。いらいらしているときの顔である。

「それで、どう、答えたんだ？」

「そんなもん、うちははっきりとは聞いてないし、よう分からんさかい、救急車で運ばれた先の病院でなくなったそうです、とだけ言うたんや。」

「そしたら？」

「そしたら、その人、これからここへ来るって言うんや。」

美佐子は口を尖がらせて言う。苦手なのである。そのような相手は。

「分かった。そっちは任しとき。だから、彼女を早く部屋へ連れて行ってやってや。」

源次郎は、やや早すぎる会社の対応に多少の戸惑いを覚えたものの、まずは部屋の整理が先決だと思う。

美佐子が女を伴って507号室へ上がっていく。

下げているマスターキーの触れ合う音が、カチャカチャと寂しげに聞こえる。

「あっ！それからなあ」と源次郎は大きな声を出して、エレベーターの前に立った美佐子呼び止める。

「念のためやけど、部屋整理している間、中から鍵かけときや。」と続ける。

美佐子は、一瞬、怪訝な顔を見せたが、源次郎が言っている意味を理解したのか、大きく頷いてエレベーターに乗り込んでいく。

それを見送ってから、源次郎は、電話の受話器をとって、名刺を見

ながら電話をかける。

(つづく)

第1話 兄と妹（その48）

電話の先は、山王大学付属病院の田畑医事課長である。

「会社のほうからもご連絡がありました。」と田畑が教えてくれる。

「ご家族が着かれる前に、担当の方が数人こちらに来られるのとこのでしたよ。」とも付け加える。

やはり、源次郎の想像以上に「会社」はすばやい対応をしている。

「そこで、田畑さんに折り入ってお願いがあるのですが・・・」と源次郎が切り出す。

「はい、なんでしょう？ 私どもで出来ることならば・・・」と田畑。

やはり、事務管理部長となった佐山を知っていると最初に言ったことが幸いしている。

丁重な対応をしようと心がけてくれている。

「そちらに搬送されたとき、ひとりの女性が付いて行ったと思うのですが・・・」

「ああ、私は直接はお会いしていませんが、小暮さんですよ。小暮忍さん。担当医がそのように言っていましたから。彼女、以前はこの病院に勤めていたもので、知っている人間も多いのですよ。その小暮さんがどうかしましたか？」

そうか、小暮忍というんだ。と源次郎は改めて思った。下の名前は聞いていなかったのだ。

「いえね、彼女のお陰で、向井さんのご病状が悪いようだと分かりましてね。彼女が教えてくれなければそれこそ誰も知らないうちに・・・という最悪の結果になっていたんだと思うとね、ぞっとする

んです。」

「そうですか、それはお役に立てて、何よりでしたね。」

田畑は当たり障りのない返事をする。

「それでね、彼女はたまたま向井さんを訊ねてこられて発見した。看護師さんでしたから、私の方から頼んで付き添ってもらったんですよ。ですから、これ以上、彼女に迷惑を掛けたくないものでね。会社の方やご家族の方には、彼女はたまたまマンションを訊ねて来ていた看護師だということでの対応をお願いしたいんですよ。まことにご厄介なことをお頼みして申し訳ないのですが……。」

源次郎は、あくまでも下手に出る。

「……ああ、分かりました。……では、彼女に触れずにお話をしてあげばいいのですよね。そういうことですよね。」と田畑は念を押す。最初から「そう言え」という感じである。

「はい、できればそのようにご配慮をお願いできますか。」

「了解いたしました。本日の担当医にもその旨ちゃんと伝えておきますから、ご安心ください。」

「有難うございます。では、そういうことで、よろしくお願いいたします。」

源次郎は、ここで電話を切るつもりであった。

どうしても言っておきたいと思ったことが言えたのだから、早く切りたかった。

「あっ！それからですね、来週月曜日には佐山部長も在院の予定ですので、お時間がございましたら是非お立ち寄りください。部長にも、今日のことはきちんとお伝えをしておきますので。」

田畑が最後にこのように言う。よほど、佐山の存在が気になるようである。

「きちんと……」というところに力が入っている。

以前に世話になった時の、佐山のおおらかな笑顔が懐かしく浮かんでくる。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その49)

源次郎が病院に電話をしている頃、美佐子と女は507号室に居た。

美佐子は、源次郎に言われたとおり、内側からドアをロックする。

「妹さん、あんたが持つて出たいものは、これに入れるといいよ。」と、美佐子は抱えてきたいくつものビニール袋と大きな目のペーパーバックを小さなダイニングテーブルの上に置く。

「はい、有難うございます。使わせていただきます。」と女が素直に礼を言う。

「私が弄るわけにはいかないから、あんたが持つて出たいものをここに運んでよ。そしたら、私が持ちやすいように包んであげるから。」と美佐子がやさしいことを言う。

女は、しばらくはぼんやりと部屋全体を見渡すようにしていた。そして、改めて、向井が寝ていた布団が敷いてある和室に向かう。和室には入らないで、その入り口のところに座り込むようにして、今はもう、その体温すら残っていないであろう布団を見続けている。

「あのさ、辛いとは思うけれど、ここでただ泣いていても前には進まないよ。あんたが自分の傍に残しておきたい物だって沢山あるだろうし、逆にここにあったらこれから来る奥さん達が辛いものだってあるだろう？それをとにかくはここから持つて出なくちゃ。夜になったら、もう来られなくなるよ。」

美佐子は、女の肩に両手をかけて、諭すように話す。

女としての気持は痛いほど分かっているつもりだ。この部屋には、自分では想像できないほどの思い出がこの女にはあるに違いない。

だが、そうした感傷に浸っている場合ではないことも分かっているのだ。

「さあ、やろう。」と美佐子が声を掛ける。

女が、ようやく動き始める。

茶碗、箸、湯飲、エプロン・・・と、見るからに女物だと分かるものを美佐子のところへ持ってくる。

美佐子が、それらを、ひとつひとつ、ビニール袋に入れる。割れやすいものは、新聞紙で包んでやる。

さあ、次は？・・・と思ったが、女の動きはそこで止まる。

「一服する時間はないよ。」と美佐子が言うが、女は黙って首を横に振るだけである。

「うそ！もうないの？ たった、これだけ？」美佐子は信じられないという顔をする。

「変なことを言っちゃうけれど、ごめんね。例えばさ、パジャマだとか、下着だとかは？」

美佐子は、それがあって当たり前だとの認識から言っているのだが、女はまた首を横に振る。

「歯ブラシとか、化粧品、あつ、それからリンスだとかは？」

女の反応は同じである。

「ええっ！ そうなの、そうだったの？・・・」美佐子も後の言葉が出てこない。

「じゃあ、お泊りはしてなかったのね。」それだけが精一杯である。

そうしてるうちに、女が何やら迷いながら持ってくる。

「あもう、このテーブルクロスとこの珈琲カップをひとつだけ頂き

たいんですけれど、駄目ですか？」と訊いてくる。

どう見ても、特に女を想像させるものではない。

テーブルクロスも、淡い青。模様も入っていないシンプルなものがある。

珈琲カップも白地にワンポイントとしてのヒマワリの模様が付いているだけである。

どちらも、そこにあっても、またなくても、違和感を感じるものではない。

「それぐらい、いいんじゃない？私が感知するところじゃないし。」

美佐子は、それらをさっさと新聞紙で包んでビニール袋に入れる。

本当に、思いのほかの少量である。ペーパーバックをいくつも準備してきたのだが、できあがったのはたった一袋だけである。

「本当に、これだけでいいんだね。まだ、時間はあるから、よく考えてみてね。」と言いつつ残して、美佐子は和室に入ってベランダのところに向かう。

開けっ放しとなっていた扉を閉めるためである。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その50)

ベランダに向かいながら、美佐子は自分が思っていたことが大きく外れたことを自分に恥じていた。

そっか、そんな関係もあるんだね。私が変なドラマの見過ぎなのか。すこし、ほのぼのとした嬉しさもあったりする。

ベランダのガラス戸を閉めるとき、美佐子は念のためにと物干しを見る。

何もかかってはいない。

ガラス戸を閉めてから、和室を抜け、今度は廊下からトイレへ行く。棚の上までを見渡したが、何の変哲もない。

それから、風呂へ行く。ここにも、何もない。

風呂場の横に設置されている洗濯機。その上に乗せてある洗濯籠には、男物の下着と1枚だけバスタオルが入っている。

その脇の洗面台にも、男性用化粧品のラベルが付いた物ばかりが整然と並べられているだけである。

最後に、キッチンと繋がっている洋室へ入る。

アコーデオンカーテンで仕切られているだけのそのスペースには、壁際に大きなステレオがあって、その正面にこれまた大きな安楽椅子がおいてある。壁際には3つの本棚が並んでいて、いろいろな大きさの本がびっしりと詰まっている。

見渡しても、絵画一枚、花瓶ひとつない、飾りつけのないシンプルなものである。

念のためにと、備え付けのクローゼットを開けてみるが、そこには、一見して高級感のあるスーツやコートが洗濯屋が掛けたであろうビニールを被ったまま並んでいるだけである。

美佐子は「よし、これであれば、完全に男の一人暮らしだな」と思う。

「じゃあ、もういいかな?・・・出ようか?」と女に声を掛ける。

女は、また、あの布団が敷いてある和室の入り口に座っていたが、美佐子の声に、

「このお布団は、このままなんですか?」と訊く。

美佐子は頷いてみせる。

「あんたには辛いかもしれないけれど、このままを見せるほうが、自然でしょ。それだけ苦しんだって証明にもなるし。汚れたままの布団、この部屋だけが向井さんがここで暮らしていたという証のような気がするんだよ。だから、このままです。」

女は、何か物悲しそうな顔をしていたが、「行くよ」という美佐子の声に、たったひとつにまとめられたペーパーバッグを提げて、出口に向かう。

そして、美佐子がドアのロックを内側から開けようとしたとき、「ごめんなさい。私に開けさせて!」と叫んだ。

美佐子は、一体何事かと訝って振り返った。

だが、女の表情に強い意志を感じて、その身を譲ることにする。

「わかったよ。あんたが開けなよ。」

女は、ぺこりと頭を下げて、ドアに向かう。

内側からのロックを、ゆっくりと回す。カチャ!という音がして、ロックが解除される。

これで、ドアを押しさえすれば、外へ出られるのだが、女はなかなか

かそうしない。

後ろから見ている美佐子には、女が泣いているのがよく分かる。ドアノブに手を掛けたまま、それを押そうとしない。肩が、背中が、細かく震えている。

昨夜、同じようにして、この場所に立ったのだ。それを思い出しているに違いないと思う。

そして、そのときには、今こうして自分が立っている場所に、向井が立っていたのだろう。

「振り返ったら向井がいる」

女の気持は、今、そう信じたいのかもしれない。

数分、そのままだった。

美佐子も、何も言わなかった。

やがて、女がドアを静かに外へ押す。

女につづいて、美佐子が外へ出る。

扉は、放っておけば、自動的に閉まっていく構造である。

が、美佐子は、その閉まりかけたドアを手で停めて、

「もう、これで最後だよ。いいかい？」と女に声を掛ける。

「有難うございます」と言って、女は、再度入り口から部屋の中を見る。

そして、部屋の中に向かって、深々と頭を下げた。

「忠明さん、有難うございました、お世話になりました。。。。さようなら。」

(づ)く

第1話 兄と妹 (その51)

美佐子は、ジン！と来るものを感じる。

女の気持に素直に同調できる。

「やっぱ、うちも女やわ」と美佐子は目頭を熱くした。

そして、女の肩に軽く手をやってから、マスターキーで施錠する。

掛けた後、再度ノブを引いてみる。施錠したときのいつもの癖である。

女は、そうした美佐子の作業中に聞こえる鍵の触れ合う音を、目を瞑って聞いている様だった。

美佐子が女を伴って管理人室の前まで戻ると、何やら中で源次郎の声がする。

美佐子は、嫌な予感がする。

私の勘は、よく当たる。

美佐子は、女を促して、そのまま管理人室の前を通り過ぎる。

そのとき、ちらりと管理人室の中の様子を見やる。

スーツ姿の男が何人かいて、源次郎となにやら話しているのが目に入る。

そのまま表に出て、女のバイクのところまで行く。

「どうも、向井さん！この会社の人に来てるみたいやな。そやから、あんたはこのままこれをもってお帰りよ。」と美佐子と言う。

女は、向井のところの会社ということに一瞬身を硬くしたようだったが、

「でも、管理人さんにもご挨拶しないと・・・それに、ヘルメットが・・・。」と言う。

そうだった。女が被ってきたフルフェイスのヘルメットを預かっていたのだ。

「そうやったね。ヘルメットか。……よっしゃ、取ってくるさかい、ここにおつて。」

と言が残して、美佐子はその足で引き返す。

管理人室には、3人のサラリーマンらしき男と、源次郎がいた。

何やら口論となっているようである。

「それだけではできません。ご家族が来られるまでは……」という源次郎の声が響いている。

「しかしですね……」と男達は迫っているようである。

美佐子は、入るなり、「こんにちは」とその男達に会釈だけをして、

「あんた、これから、ちょいと出てくるさかい、あと、頼んます。」

と言いながら、奥においてあったヘルメットを持ち出してくる。

源次郎と目が合う。

「ほうか、気いつけて行きや。はよ、帰るんやで。」と源次郎が目配せをする。

美佐子は、わざとらしくドアをガーンと強く閉じて、表に出て行く。

「はい、取って来たで。」と美佐子。

「はい、お世話を掛けました。有難うございます。」と女が頭を下げてヘルメットを受け取る。

ひとつだけとなったペーパーバックはしっかりと座席後部に括りつけてあって、一旦その上にヘルメットを置く。

「それで……。これなんですが……」と、女は胸ポケットか

ら携帯電話を取り出す。

「これは？」と美佐子が問う。

「これは、向井さんの携帯です。お返ししておかないと、とは思ったんですが、なかなか踏ん切りが付かなくて。今朝、救急車に同乗するときに、お財布に入っていた保険証を持って出たんですが、そのとき、その傍にあったので、一緒に預かりました。それから、あんなことになって、私、パニックになっていたんだと思います。この携帯に管理人さんの番号が記録されていたので、これをそのまま使って電話を掛けてしまいました。後で気が付いたんですが、おかしいことになりますよね。ご本人が亡くなられてからの通話って。」

女は、困惑した顔をしている。

「これ、どうすればいいんでしょう？」と改めて訊いてくる。

「そう言われてもなあ・・・」と問われた美佐子はさらに困惑する。

美佐子は少し考えたあと、「うちの人にだったら知恵はある」なんて思っ

「だったら、預かるよ。悪いようにはしない。うちの人に任せとけば、その辺、うまくやるわよ。」と提案する。

女は「はい、では、よろしくお願いいたします」と言って、その携帯を美佐子に渡す。

「ほな、気いつけて帰りや。今度は、あんたが事故起こさんようにな。」と美佐子が言う。

女は、フルフェイスを頭からすっぽり被って、バイクに跨ってからエンジンを駆ける。

「何かあったら、また、ここへ来てくれたらええで。」と美佐子は大きな声を出す。

フルフェイスの頭が、小さくコクリと頷く。

ブォーンという大きな音が響いてバイクが動き出す。あっという間

に、通りの角を曲がって見えなくなる。

美佐子の手には、女の胸ポケットの温かさに包まれた、小さな携帯電話だけが残されていた。

その上から見える液晶画面には「14..45」と刻まれている。

(つづく)

第1話 兄と妹 (その52)

女を見送った後、美佐子はそのまま管理人室に戻る気はさらさらなかった。

嫌な奴がいるのだ。しかも、3人でもある。

こうした交渉事は、任せておくに限る。日頃はどことなく頼りない男だが、さすがは元総務部次長をやっただけのことはあって、こうした交渉はびっくりするほど旨くまとめてくる。

源次郎の顔が浮かんでは消える。

そんなことをぼんやり考えていると、その傍をスーツ姿の男が3人出て来た。

多少、殺気立っている感じがする。

どうやら、前の通りの反対側に車を停めているようで、そこに向かうのに、続いて流れてくる車の列が途切れるのを待っている。

「あの頑固親父にも参ったなあ。部長になんて報告するんだよ。」などと愚痴を言っているのが聞こえる。

美佐子があのととき入ってきた人間だとは誰も気付いていないようだ。

それを幸いに、美佐子は彼らの動きを注意して見ている。

と、そのうちの1人が携帯電話を掛ける。

「申し訳ありません。開けてもらえないんですよ。どうしても、ご家族でなければ・・・と頑として・・・」

どうも、その電話の相手は叱っているようである。掛けた男は、まさに目の前に居る人間にするように、ひたすら頭を下げている。

美佐子には、それが滑稽でたまらない。

その後、掛けた男は、何度となく「はい」を繰り返す。指示を受けているようである。

そして、車の流れが止まったときを見計らって、向い側に停めた車に向かつていく。

乗ってから、1分もしないうちに、その車が走り去った。

それを見届けてから、美佐子は源次郎が待つであろう管理人室に戻った。

「ただいま。・・・あんだ、ほんま、ごくろうさんやったなあ。」と美佐子が声を掛ける。

源次郎は、椅子に座ったまま、向こうを向いていたが、美佐子の声に振りかえって、

「今の連中、彼女とはぶつかってないよな？」と訊く。

「ああ、ちよつとの差。ニアミスもせんと、ちゃんと、帰したよ。」

「そうか、そら良かった。ところで、部屋のほうはちゃんと片付いたんか？」

「うん。女つ気のおの字もない。完璧やで。これで、いつ来て貰ってもOKや。」

「よっしゃ。これで後は夜やな。」

2人はそれぞれの思いで話しているが、肝心なところはちゃんと通じている。

「あっ！そうや、これなんやけど。」と美佐子が女から預かった携帯電話を見せる。

「ああ・・・、これ、向井さんのやろ？・・・彼女、どないするんかな？とは思ったんやけど。そうか、返して来たんか。」

「あんだ、預かってえな。うち、こんなん持ってるの嫌やし。」と美佐子は甘えた言い方をする。

「よっしゃ、預かったる。」と源次郎が手を出す。

源次郎がその携帯電話に表示されている時間を見て、ポツリと言う。

「トラブルさえなけりゃあ、飛行機が仙台を離れた時刻やなあ。」

(つづく)

第1話 兄と妹 (その53)

源次郎は、預かった携帯電話を握り締めて、何やら考えている。

美佐子は、不要となったビニール袋とペーパーバッグを奥に片付けに入っている。

暫く、そのままの時が流れていく。

管理人室の時計が、ボンボンボンと3時を告げる。

美佐子が、奥から声を掛ける。

「あんた、お茶にでもしようか?・・・珈琲か?・・・それとも・・・」

源次郎が窓の外を眺めたまま、それに答える。

「渋いお茶にしてや。」

美佐子が玉露を夫婦湯飲みに入れてきて、ひとつを源次郎の前に置いて、自分は別のテーブルのところに座り込む。

「そやけど、あの妹さん、いや、正確には妹さんやないけど、健気などこあったで。うちな、ちよつと見直してん。」

美佐子は、部屋の中での様子を思い浮かべるように言う。

源次郎がそれに頷くようにしながら、湯飲みを持って、美佐子が居るテーブルに着く。

「そうか、お前もそない思うか?・・・わしもな、あんな人が向井さんところに入ったりとったとは、ほんま思わなんだ。でも、ええ子やで。向井さんらしいわ。あんな子に慕われとったんやさかい。」

美佐子が源次郎に近づくようにしてから、やや小声になって、

「あんたが知ってるかどうか知らんけど、あの子、お泊りはしてなかったで。ほんまに、ご飯一緒に食べに来とっただけみたいや。変に勘ぐったうちが恥ずかしゅうなったわ。」
と言う。

「それは、わしも聞いたわ。そういうことだったんや、と思うたな。」

「それでな、あの子、女物の茶碗や箸とな、テーブルクロスと珈琲カップの1個だけを持って行っただわ。可愛いなあ、って思うたで。ほんまに、好きやったんやで。思い出にしたいんやろうな、向井さんのこと。最後にな、部屋の中に向かって、有難うって頭下げとった。あれって、男冥利やな。」

「そうか、そない言うたんか。ほんまの家族なんやな。あの2人は。そんな、気がするで。」

「家族なあ。ほんまの家族って、なんやろうな？うち、よう分からんようになったわ。」

「夫婦、親子、兄弟……。そういうても、それだけで家族とは言えんような世の中になっとるしな。こうして、毎日一緒に生活しとるから、わしらも夫婦ちゃうか？これが、遠くに離れておったらそりや家族とか、夫婦とか言えんようになるんとかちゃうか？」

「まあ、それだけで、家族じゃなくなると思えんけど……。そやけど、あんたの言うとおりかも知れんなあ。もう15年も前やけど、あんたが東京の支店へ行くかも知れんと言ったとき、うちは、絶対に反対やって言うたやろ。まだ、ばあちゃんがおったさかい、うちが付いて行けへんのは分かつとったんや。それで、あんたひとり行かしたら、うちはもう夫婦やないって思うたもんな。」

「あれは、わしが浮気でもすると思うてや、と思とったんやが、違うんか？」

「一緒にいたかったんや。毎日顔見たかったんや。離れて暮らすなんて、うちには考えられなかった。ただ、それだけや。」

美佐子は、少しだけ照れたような顔をする。

「そうか、ただ一緒にいたいだけ、毎日顔が見たいだけ。それが、ほんまの家族なんかもしれんなあ。」

源次郎は、向井の携帯電話を握り締めている。

「あの子な、この携帯から、自分との送受信記録と自分の電話番号、全部削除してるんや。辛かったと思うで。・・・・でも、これでええんや。これから、またほんまの家族を見つけたらええんや。そやなあ、美佐子。」

美佐子は、にっこり笑って、大きく何度も頷いた。

(つづく)

第1話 兄と妹 (最終話)

午後7時に電話があった。向井の娘からである。

それから、30分ほどで、彼らはやってきた。昼間やってきた男達も一緒である。

着くなり、妻と娘が部屋を見せろという。それでは、と源次郎が案内する。

源次郎は、遠慮するつもりで、入り口で待つことにする。

2人は、くるっと各部屋を一回りしただけで、10分足らずで部屋を出てくる。

そのときの状況も聞こうとしない。殆ど無言のままである。

昼間に来ていた会社の人間から詳細を聞いていたのかもしれないが、あまりにもそっけない、と源次郎は思う。

少なくとも、夫であり父であるひとが住んでいた部屋である。取り乱せとは言わないが、もう少し、感慨深いものがあってもよさそうなものだ。

「もう、よろしいのですか？」

たまらず、源次郎がそう声を掛ける。

「はい、結構です。お手間を取らせました。」と娘が言う。

妻の方は、その間も一切喋らない。涙もない。

気丈なのか、また、今起こっていることが現実として受け止められていないのか、それは源次郎には分からない。

そう言えば、この母娘がここに来るのは初めての筈。最初の入居するときも、向井と会社の若い連中が来ただけである。

向井が夏祭りの夜に話していた家族の中にある微妙なずれが、源次郎にも何となく分かるような気がする。

源次郎は、その部屋を出るとき、預かっていた携帯電話をそつと備え付けの下駄箱の上に置いてきた。

管理人室に戻ると、会社の男達が、美佐子との間で、家賃の精算や退去届など、一連の事務処理をそつなく片付けたところだった。

明日、運送屋を来させて「ここを引き払う」と男達が言う。
こちらは、特に異存はない。

母娘は、管理人室に入ることみせず、そのまま表に停めたらしい車に戻っていく。

美佐子がそれに気付いて、

「あの・・・お茶の一杯だけでも飲んでいってください。」

と声を掛けるが、本人達に成り代わって、傍にいた男が、

「これから、明日の通夜、明後日の葬儀といろいろと準備もありますので・・・」

とそれを遮る。

30分もいただろうか、複数の車の発信音を残して、辺りは急激に静かになった。

源次郎も美佐子も、ただ啞然とするだけである。

「あんなあ、会社の人さ、向井部長ともあろう人が何が良くってこんなちっぽけな所にいたんだろう?・・・って呟いたんや。うちな、悔しゅうて。。。。」

美佐子がポツリと言う。

「ええやないか、人が何と言おうが、ここを自分の住まいや思うて

一生懸命に生きとる人がおるんやから。それが、わしら夫婦の宝物やないか。それで、十分や。な、そうやろ、美佐子。」

源次郎は、妻の肩に手をやって、そう元気付ける。

「そやな、今日はこれでおしまいや。また、明日から頑張らな！」

「ほんま、おつかれさん。」

源次郎と美佐子の長い一日がこうして幕を閉じた。

このあと、あの女、小暮忍から「507号室が空くのであれば是非入居させてほしい」と電話があるなどとは、夢にも思っていなかった夫婦である。

（第1話 完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1852c/>

《連載小説》『俺たちあ夫婦で管理人』

2010年10月10日19時55分発行